静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第127集

御領所遺跡

平成12年度二級河川小出川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第127集

御領所遺跡

平成12年度二級河川小出川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

御領所遺跡が所在する菊川町は静岡県西部地方、すなわち遠江地方の東部に位置する。四方を丘陵地帯に囲まれた比較的平坦な盆地を擁し、特に東側の丘陵地帯である牧之原台地では隣接する諸町とともに茶業が盛んであり、当該地域における主要産業の一つとなっている。町域のほぼ中央を南流する菊川は多くの支流を有し、今回調査された御領所遺跡が臨む小出川もこれら支流の一つである。菊川は沃野を形成するという恩恵をもたらす一方、古来より度重なる氾濫で流域の人々を苦しめてきた。この荒ぶる川に最初の戦いを挑んだ人々の証跡が白岩遺跡として残されている。白岩遺跡は弥生時代中期後葉の土器様式である「白岩式土器」の標識遺跡として広く知られており、平成10年度には白岩遺跡の南側に隣接する、或いは白岩集落の一角である可能性が検討されている片吹遺跡の発掘調査が当研究所により実施され、弥生時代の自然流路や中世に比定される溝状遺構などが検出された。また、近隣の地域では地元の菊川町教育委員会が精力的に発掘調査を行い、数々の成果を挙げており、集落、生産、墓制といった当該地域の弥生文化の内容が次第に具体像を伴うようになってきたと言える。さらに、菊川町内では横穴群に代表される古墳文化の解明も重要課題であるが、これも前進の一途を辿っている。

近年の県内では歴史時代の考古学的調査・研究も活況を呈している。菊川町においても、律令時代や中世期の諸遺跡の様相が明らかになりつつある。就中、東遠地方一帯に勢力を広げた国人領主の横地氏の本拠が町内に所在したこともあり、横地氏関連諸遺跡の調査・整備が多大な労力を傾注して行われている。その成果の一つとして、平成11年、『横地城跡総合調査報告書』が菊川町教育委員会により上梓され、翌平成12年には同報告書の資料編が刊行された。これにより、県指定史跡である横地城跡およびその他の関連遺跡の保存整備並びに活用に向けて大きな一歩を踏み出すことができたと評価できよう。今回の御領所遺跡の埋蔵文化財調査も横地氏関連遺跡の一つであることを意識しつつ行われたが、小出川の旧流路により著しく該期の遺構面が破壊され、また、狭小な調査区であったにもかかわらず、多数の遺物が出土した。これらの資料は古代から近世にわたる横地地区の様相の一端を考察するに際して重要な情報を提供しているとも言えよう。

末筆になったが、調査並びに報告書作成に当たっては、静岡県袋井土木事務所・菊川町教育委員会等の関係諸機関各位に感謝するとともに、資料整理や泥濘と闘いながら現地調査に参加した調査員・作業員の労をこの場を借りてねぎらいたい。

平成13年 3 月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　斎藤　忠

例　　言

1　本書は静岡県小笠郡菊川町加茂地先、東横地地先に所在する御領所遺跡の発掘調査報告書で、静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告の第127冊目に相当する。

2　調査は平成12年度二級河川小出川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所からの委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を実施した。

3　現地発掘調査は平成12年４月から５月まで行った。資料整理作業は平成13年２月から３月まで実施した。

4　調査体制は以下の通りである。

現地発掘調査（平成12年度）

所長　斎藤　忠、副所長　山下　晃、常務理事　伊藤友雄、調査研究部長　佐藤達雄
調査研究部次長　及川　司、調査研究二課長　篠原修二、総務課長　杉木敏雄
会計係長　田中雅代、調査研究員　大林　元

資料整理作業（平成12年度）

所長　斎藤　忠、副所長　山下　晃、常務理事　伊藤友雄、調査研究部長　佐藤達雄
調査研究部次長　及川　司、資料課長　大石　泉、総務課長　杉木敏雄、会計係長　田中雅代
調査研究員　大林　元

5　グリッド基準杭の基準点測量は玉野総合コンサルタント株式会社に委託した。

6　掘削に関する業務は菊川建設株式会社に委託した。

7　本書の遺物写真は当研究所技術作業員　杉山すず代が撮影した。

8　本書の執筆は調査研究員　大林　元が行った。

9　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

10　本発掘調査にかかる出土資料および記録資料については、静岡県教育委員会が保管している。

凡　　例

本書における遺構表記（略号）は以下の通りである。

ＳＲ：自然流路　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＸ：落ち込み状遺構

目　次

序
例言
凡例
目次

第１章　位置と環境 ……1

第２章　調査経過
　第１節　調査に至る経緯 ……3
　第２節　発掘調査の経過と方法 ……3

第３章　遺構・遺物
　第１節　基本層序と他の土層 ……5
　第２節　検出遺構 ……6
　第３節　出土遺物……12

第４章　まとめ……25

追記……27

挿図目次

第１図　菊川町位置図……1
第２図　周辺遺跡分布図……2
第３図　国土座標図……4
第４図　調査区位置図……4
第５図　調査区全体図……6
第６図　調査区東壁セクション図　その１……8
第７図　調査区東壁セクション図　その２……8
第８図　調査区東壁セクション図　その３……8
第９図　調査区南壁セクション図……8
第10図　第７トレンチ東壁セクション図……8
第11図　第１トレンチ北壁セクション図……9
第12図　第２トレンチ北壁セクション図……9
第13図　第３トレンチ北壁セクション図……9
第14図　第４トレンチ北壁セクション図……9

第15図　第５トレンチ北壁セクション図……9
第16図　第６トレンチ北壁セクション図……9
第17図　ＳＤ01実測図……10
第18図　ＳＸ01実測図……10
第19図　灰釉陶器実測図……13
第20図　山茶碗実測図　その１……16
第21図　山茶碗実測図　その２……17
第22図　その他の古代・中世土器実測図……17
第23図　近世土器実測図……19
第24図　銭貨拓影図……20
第25図　金属製品実測図……21
第26図　石製品実測図……21
第27図　確認調査出土遺物実測図……22

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……2
第２表　土層一覧表……7
第３表　出土土器観察表　その１……23
第４表　出土土器観察表　その２……24
第５表　出土金属製品観察表……24
第６表　出土石製品観察表……24

写真図版目次

図版１　１　南区全景（北より）　２　南区全景（南より）

図版２　１　南区東壁セクション　２南区南壁セクション
３　ＳＲ01西側土堤　山茶碗出土状況　４　南区中世遺構面直上　山茶碗出土状況
５　南区中世遺構面検出状況

図版３　１　北区全景　２　ＳＤ01完掘状況

図版４　１　ＳＸ01完掘状況　２　北区東壁セクション
３　ＳＲ01西側土堤直下　山茶碗出土状況

図版５　１　北区中世遺構面下層　灰釉陶器出土状況　２　第２トレンチ北壁セクション
３　第２トレンチ　灰釉陶器出土状況

図版６　1　灰釉陶器　壺（第19図23）　2　灰釉陶器　壺（第19図19）
3　灰釉陶器　壺（第19図21）　4　灰釉陶器　壺・甕（第19図）
5　灰釉陶器　長頸瓶・壺（第19図）
6　灰釉陶器　碗・皿・小碗（第19図）　その１

図版７　1　灰釉陶器　碗・皿・小碗（第19図）　その２　2　山茶碗　碗（第20図30）
3　山茶碗　小碗（第21図42）　4　山茶碗　小碗（第21図37）
5　山茶碗　小碗（第21図40）　6　山茶碗　甕（第21図51）
7　山茶碗　碗（第20図）　その１

図版８　1　山茶碗　碗（第20図）　その２　2　山茶碗　碗（第20図）　その３
3　山茶碗　碗（第20図）　その４　4　山茶碗　碗（第20図）　その５
5　山茶碗　鉢・こね鉢（第20図）　6　山茶碗　小碗（第21図）　その１
7　山茶碗　小碗（第21図）　その２　8　山茶碗　甕・壺（第21図）

図版９　1　土師器　鍋・甕（第22図）　2　須恵器　坏蓋（第22図１）
3　内黒土器　坏（第22図２）　外面　4　内黒土器　坏（第22図２）　内面
5　かわらけ（第23図）　6　信楽焼　灯明受皿（第23図14）

図版10　1　瀬戸・美濃焼　貧乏徳利（第23図19）　2　志戸呂焼　香炉（第23図12）
3　志戸呂焼　香炉・灯明皿・擂鉢（第23図）
4　志戸呂焼　徳利・大形鉢（第23図）　5　近世陶磁器（第23図）
6　鉄製品・砥石（第25・26図）

図版11　1　矢立て（第25図４）　2　確認調査出土遺物（第27図）
3　銭貨（第24図）　正面　4　銭貨（第24図）　背面

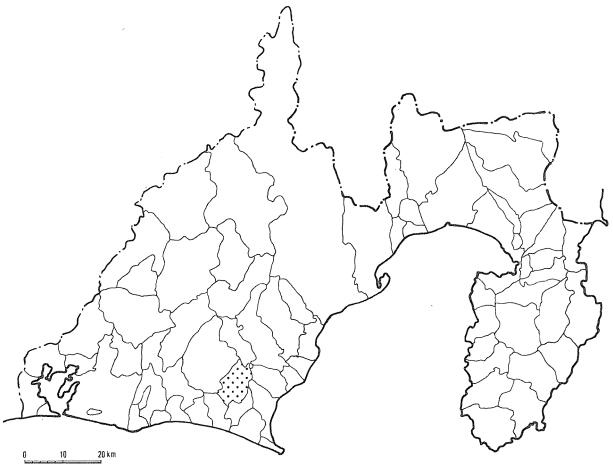
第１章　位置と環境

御領所遺跡は静岡県小笠郡菊川町加茂地先および東横地地先に所在する。今回調査区の面する小出川は菊川の一小支流で、菊川町本所付近に源を発し、南南西へ約２km下って同町西横地付近で菊川本流に合流する。菊川は掛川市東山付近に源流を有し、菊川町・小笠町・大東町を経て遠州灘に注ぐ河川で、東遠地方の一角に肥沃な沖積平野を形成しているが、古くから頻繁に氾濫し、流域の人々を悩ませ続けてきた。また、御領所遺跡の東南方には菊川の主要支流である牛渕川が南流しているが、より水量の多い菊川の旺盛な沖積作用により当遺跡南約1.5kmの地点で菊川に最接近しつつも合流し得ず、菊川町および小笠町の東部丘陵地帯、すなわち牧之原台地の西端部を削るような流路をとる。そして、当遺跡南約7.5km付近で西へ蛇行して菊川本流に合流する。御領所遺跡は氾濫原に立地しているのである。

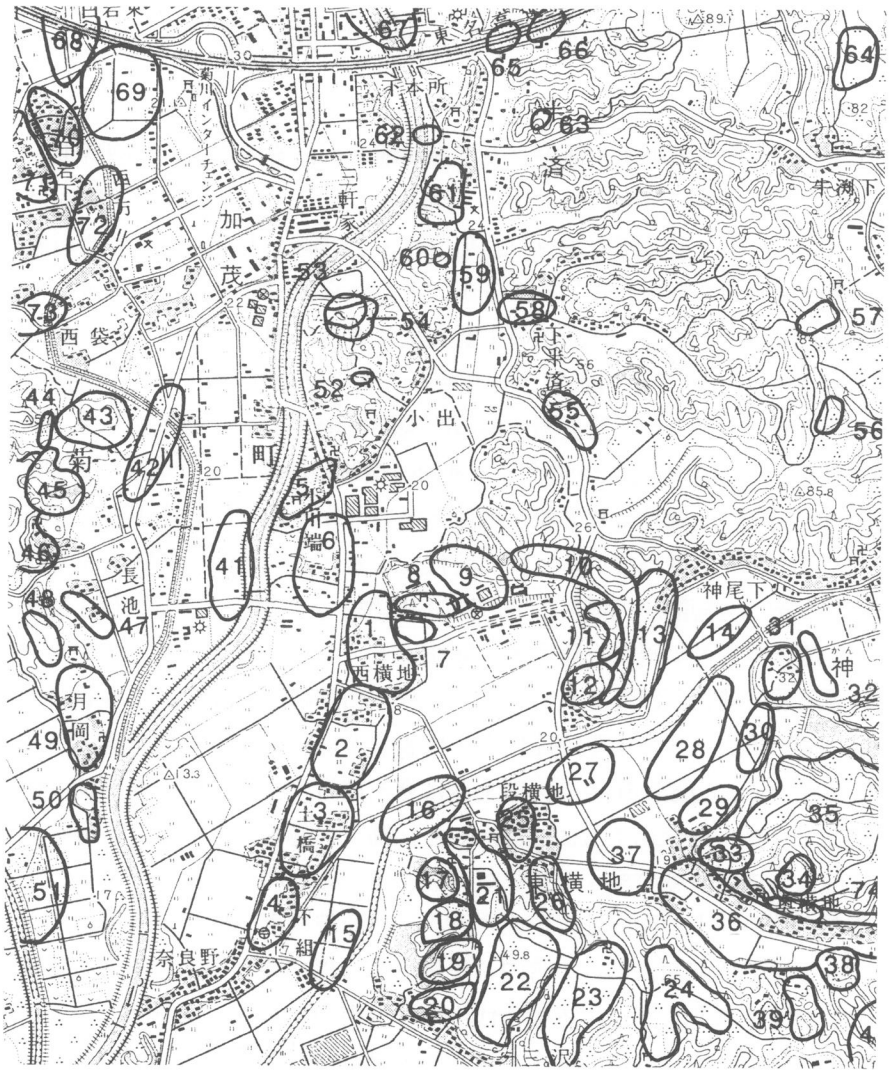
現在のところ、菊川町最古の遺跡は牧之原台地西端部の河岸段丘上に立地する三沢西原遺跡で、旧石器時代後期の遺構・遺物が検出されている。縄文時代になると、三沢西原遺跡と同じ丘陵上に集落が営まれるようになり、早期には当遺跡や東横地西原遺跡が出現し、中期に至って久保之谷遺跡・前山遺跡・山王裏遺跡・猿田谷遺跡などの集落が丘陵全域に展開する。しかし、続く後・晩期では目下町内唯一の包蔵地である身打原遺跡で遺物が散見されるにとどまり、当該時期の様相は明らかにされていない。弥生時代の遺跡では、菊川町内はもとより東遠地方を代表する白岩遺跡が御領所遺跡の北北西約２kmの地点、西方川流域に所在する。当遺跡出土の弥生土器は東遠地方の弥生時代中期後葉の標識資料として白岩式なる様式名を与えられ、白岩式土器は他地方にも伝播し、静岡県内外に広く分布している。白岩式期の遺跡としては他に牛渕川流域の椎ヶ下遺跡が存在する。弥生時代後期になると、土橋遺跡などの比較的大規模な集落が自然堤防上の微高地に形成され、御領所遺跡も同様の集落遺跡である。ところが、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて町内の集落分布は縄文時代中期のそれとほぼ重複し、再び丘陵上に生活の中心が展開される。さらに古墳時代中期には町内における遺跡そのものが確認されておらず、後期になると御領所遺跡やこれに南接する林光寺遺跡などの集落群が沖積地において復活したかのごとき様相を呈する。

御領所遺跡周辺地域の主な古墳では、東遠地方最古の前方後円墳として小笠町上平川に所在する大塚１号墳が挙げられる。当古墳は粘土槨の埋葬施設を有し、三角縁神獣鏡２面が副葬されていた。またこれも小笠町内ではあるが舟久保古墳も当地方最大の前方後円墳として特筆されよう。菊川町においては前方後円墳である庚申塚古墳が最古の前期古墳であるが、中期後半には宇藤古墳群に代表される初期群集墳が造営され、後期前半まで継続する。そして６世紀後半～７世紀には藤谷横穴群や宇藤横穴群などの丘陵上の横穴墓が全盛期を迎える。

律令時代になると当該地域は城飼郡に編入され、御屋敷段遺跡で検出された平安時代の大形掘立柱建物跡は城飼郡衙の主要施設とも推定されている。武士階級が台頭する中世に入ると当該地域には土豪の横地氏が割拠し、県指定史跡である横地城跡を残している。また、菊川町東部丘陵地帯の皿山古窯跡群や殿ヶ谷遺跡、林光寺遺跡、そして御領所遺跡も横地氏に深く関連し、これらは横地地区の領域で捉えるのが適切と考えられる。



第１図　菊川町位置図



第２図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	御領所遺跡	弥生～近世	26	段屋敷遺跡	縄文～古墳	51	耳川遺跡	縄文～古墳・鎌倉
2	林光寺遺跡	古墳（前）～近世	27	田中遺跡	古墳～鎌倉	52	小出横穴群	古墳（後）
3	土橋遺跡	弥生～中世	28	杉の谷遺跡	奈良～近世	53	小出遺跡	縄文・弥生
4	西軒遺跡	弥生～中世	29	杉の谷橋遺跡	奈良～室町	54	上ヶ城	中世
5	小川端Ⅰ遺跡	弥生～平安	30	明体遺跡	奈良～室町	55	深川横穴群	古墳（後）
6	小川端Ⅱ遺跡	弥生～室町	31	身打原遺跡	縄文～室町	56	松ヶ谷遺跡	縄文（中）
7	米山屋敷遺跡	中世～近世	32	山脇遺跡	奈良～室町	57	神尾原遺跡	縄文
8	藤谷横穴群Ｂ群	古墳（後）	33	殿ヶ谷遺跡	平安～室町	58	榎木遺跡	平安～鎌倉
9	藤谷横穴群Ａ・Ｃ群	古墳（後）	34	藤丸館遺跡	縄文・中世	59	下田遺跡	弥生～近世
10	宇藤古墳群	古墳（中・後）	35	横地城	室町	60	下田横穴群	古墳（後）
11	宇藤横穴群Ａ群	古墳（後）	36	横地城下遺跡	平安～室町	61	四ツ枝遺跡	弥生～近世
12	宇藤横穴群Ｂ群	古墳（後）	37	横地城西遺跡	平安～室町	62	新井遺跡	古墳
13	宇藤遺跡	縄文～中世	38	伊平遺跡	縄文～近世	63	ウチワンヤ横穴群	古墳（後）
14	大平遺跡	奈良～近世	39	延命段遺跡	平安～室町	64	アラコ原遺跡	縄文（中）
15	寺屋敷遺跡	中世	40	小太郎砦	平安～近世	65	下本所Ａ横穴群	古墳（後）
16	椎ヶ下遺跡	弥生（中）～平安	41	宮ノ西遺跡	中世	66	下本所Ｂ横穴群	古墳（後）
17	東横地西原遺跡	縄文・弥生～古墳	42	長池橋遺跡	弥生～中世	67	島遺跡	縄文（後）・弥生
18	久保之谷遺跡	縄文～室町	43	長池北遺跡	弥生（後）	68	白岩遺跡	縄文～近世
19	前山遺跡	縄文（中）～近世	44	長池横穴群	古墳（後）	69	片吹遺跡	弥生～近世
20	山王裏遺跡	縄文・弥生	45	長池遺跡	縄文～中世	70	白岩下Ⅲ遺跡	弥生（後）～平安
21	御屋敷段遺跡	縄文・弥生・古代	46	長池古墳群	古墳（後）	71	白岩下Ⅰ遺跡	縄文（晩）～平安
22	三沢西原遺跡	旧石器～鎌倉	47	長池南遺跡	縄文・奈良～室町	72	白岩下Ⅱ遺跡	縄文（中）
23	興嶽寺原遺跡	縄文～奈良	48	助九郎遺跡	弥生	73	西袋遺跡	弥生～近世
24	猿田谷遺跡	縄文～近世	49	月岡Ⅱ遺跡	古墳～近世	74	武衛原横穴群	古墳（後）
25	東側遺跡	弥生～近世	50	月岡Ⅰ遺跡	弥生（中）			

第１表　周辺遺跡一覧表

第２章　調査経過

第１節　調査に至る経緯

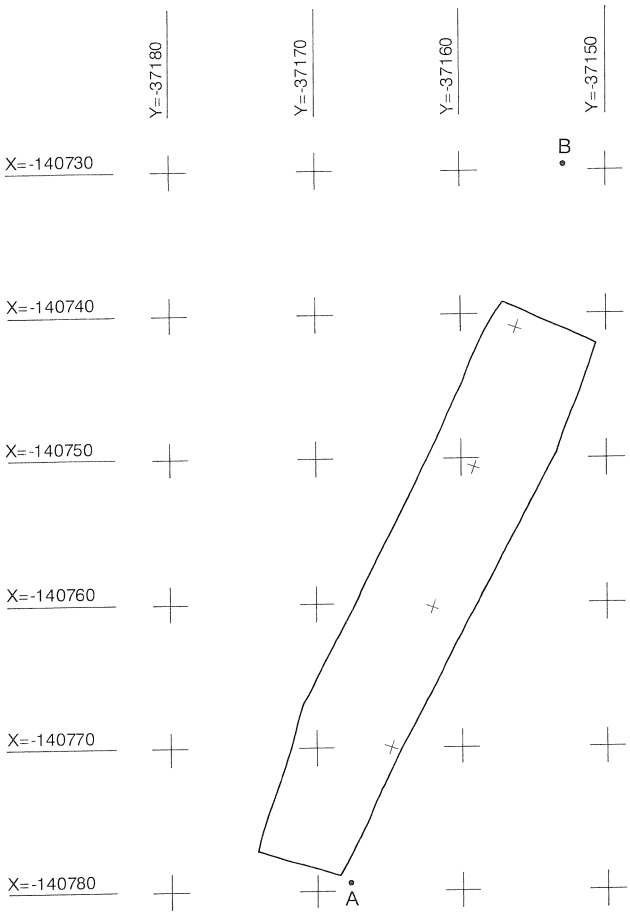
前章で述べたように、菊川の支流である小出川が御領所遺跡を貫流している。この小河川の通常の水量は比較的少ないが、梅雨季などに降雨が連続集中するとその度ごとに流域の住宅地や耕作地は増水した小出川からの浸水の脅威にさらされてきた。こうした中、小出川の護岸工事事業が予算化され、工事対象地に周知の埋蔵文化財包蔵地である御領所遺跡の北西部が含まれるため、平成11年度 二級河川小出川浸水対策特別緊急工事および平成12年度着工予定区について対象面積4500㎡の確認調査が菊川町教育委員会により実施された。この確認調査は平成11年11月18日から同年12月１日にかけての計６日間行われ、３～４㎡四方のトレンチを計13箇所設定し、重機で表土を除去した後人力で掘削し遺構の有無を確認するという方法が採られた。その結果、平成11年度特別緊急工事にかかる部分では古墳時代と中世の遺構面が確認され、これを受けて平成11年２月２日に菊川町教育委員会を主体とする発掘調査が着手された。この発掘調査は平成11年３月22日に完了し、その成果は平成12年３月30日発行の調査報告書として公表された。それによると、古墳時代後期の掘立柱建物跡２棟を含む集落の一部および中世の溝状遺構が検出されている。

一方、平成12年度工事予定区にかかる部分では№12トレンチと№13トレンチで中世または古墳時代に属すると考えられる遺構面が検出され（第４図）、これを受けて静岡県袋井土木事務所・静岡県教育委員会文化課・菊川町建設課・菊川町教育委員会の４者で協議がなされ、護岸工事に先立って発掘調査を実施することが確認された。しかし、菊川町教育委員会では区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査などがすでに予定されており、同委員会が今回の調査に対応することは不可能であったため、当研究所へ発掘調査を依頼することが決定された。

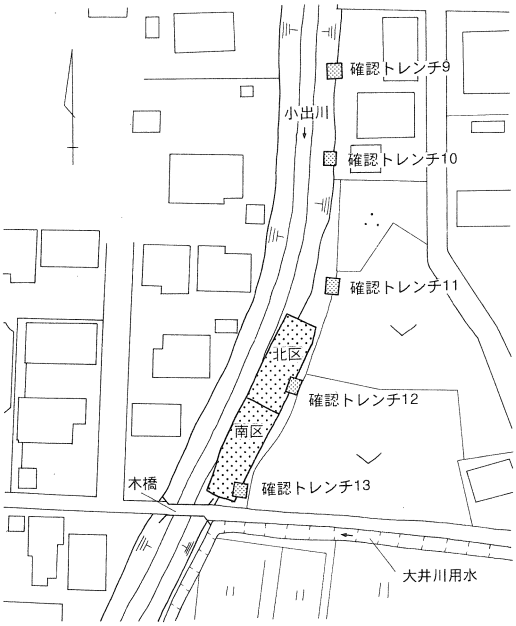
第２節　発掘調査の経過と方法

平成12年４月３日、発掘資材の準備および重機進入路用の鉄板敷設開始。今回の調査区は小出川の左岸堤防上に位置し、護岸工事の事前調査ゆえに堤防そのものの保全が不可欠であるということに加えて軟弱な砂礫質・シルト質土壌を約２ｍ掘り下げる必要があるため、調査区西面に鋼矢板を打設することにした。この打ち込み作業は４月第１週中に完了した。これに並行して資材置場と休憩所を兼ねたコンテナハウスを調査区東側の借地内に設置し、鋼矢板の打ち込みに続いて調査区の南・北・東面を工事用防護フェンスで囲み、部外者が危険性を伴う作業の実施とその範囲を認知できるように配慮した。

当初計画の調査区プランは７×40ｍの長方形であったが、実際の用地境は緩やかに蛇行する小出川左岸堤防に沿っているなどのため、結果的にややいびつな平面形を呈することになり、最終面での調査下面面積は215.9㎡に達した。この調査区を掘削するに当たり、調査計画の段階から排土仮置き場の確保が懸案であった。そこで、調査区を南北に分割し、２区を交互に掘削することにより用地内に常時約140㎡の排土置き場を確保する方法が採用された（第４図）。南北両区は任意に設定した調査区主軸を共有し、これに沿って両区統一のグリッドも設定した。グリッドは10ｍピッチで、東から西へはアルファベット、北から南へは数字を用い、両者を組み合わせた呼称となっている（第５図）。グリッドの方向と国土座標方位との関係は第３図に示す通りである。測量に使用する基準杭は任意の調査区主軸上に２本打設した（第３図Ａ・Ｂ点）。



第３図　国土座標図（1：500）



第４図　調査区位置図（1：1500）

４月第２週に南区を重機により確認調査時に遺構面とも考えられていたレベル（地表下50～70㎝）まで掘削し、人力で遺構の検出・精査を試みた。ところが、次章で後述する畦道状の高まりを確認したにとどまり、このレベルでは近世以前の遺構面は存在しないことが判明したため、４月第３週に再び南区を重機により掘り下げ、地表下約1.2ｍにて中世に比定される遺構面の一部を検出した。しかし、当レベルにおいてさえも区内の大半にはより新しい時期の流路の覆土が広がっており、新たに東西２本・南北１本のトレンチを設けて人力で掘削した（第５図第５～７トレンチ）。その結果、自然流路の下端が確認され、４月第３週から第４週にかけてこの流路を人力で掘り下げ、４月25日に完掘し、同日、南区の全景撮影を行った。確認調査№13トレンチでは「古墳時代遺構面」がさらに約40㎝下層に存在するとされていたが、前述の中世期遺構面残存部の直下を掘り下げたところ、そのような遺構面は認められなかった。また、自然流路以外の遺構も確認できなかった。測量等の記録作業を終えた後、５月１日に重機で埋め戻し、南区の調査を完了した。

５月１日には北区の掘削にも着手した。南区の調査結果を受けて北区の状況を類推できたため、自然河川の堆積層の直上まで重機により掘り下げ、大型連休明けの５月第２週に人力による掘削・精査を行った。その結果、自然河川堆積層を中心に多数の遺物を検出し、若干ながら遺構も確認し得た。これらの完掘状況の写真撮影後、東西に３本のトレンチを設けて人力で掘削し（第５図第１～３トレンチ）、遺構面より下層の状況を調べたが、古代～中世の遺物を検出したものの、さらなる遺構面を確認することはできなかった。５月第２週から第３週にかけて測量等の記録作業を実施した後、北区全体を人力でさらに掘り下げ、遺物の検出を試みたが、これにより最終面に達した後、５月23日より重機による北区の埋め戻し、続いて鋼矢板の引き抜きを行い、５月30日を以て現地作業は終了した。

南北両区とも河川の直近で湧水の可能性があったため、区内に排水溝を巡らし、集水枡を設けてセンサー付き100ボルト水中ポンプを設置し、常時排水状態を維持した。
検出した遺構については当研究所の整理番号に準じ、自然流路にはＳＲ、溝状遺構にはＳＤ、落ち込み状遺構にはＳＸで始まる通し番号を付与した。一方、出土遺物については土器にＰ、金属製品にＭ、石製品にＳで始まる通し番号を付与した。最も基本的な整理作業である遺物の洗浄ならびに遺物台帳記入は現地作業の末期に実施・完了した。現地の記録のうち図面については遺構平・断面図、土層堆積状況図、地形測量図を作成している。これらの縮尺は１：20または１：50である。現地で撮影した写真は６×７判（モノクロ）および35㎜（カラー・カラーリバーサル・モノクロ）で記録している。
整理期間は関係諸機関との協議の結果、平成13年２～３月の２ヶ月間に設定された。整理作業は遺構挿図の作成に並行して遺物の注記・接合から開始され、遺物は実測・拓本が完了すると必要に応じて石膏による復原を行い、写真撮影を実施した。遺物写真は６×７判中型カメラ（モノクロ）および35㎜小型カメラ（カラーリバーサル）を用いて撮影した。これらを受けて原稿執筆・編集を行い、終了後、遺物および調査関連記録等の収納作業を実施した。

第３章　遺構・遺物

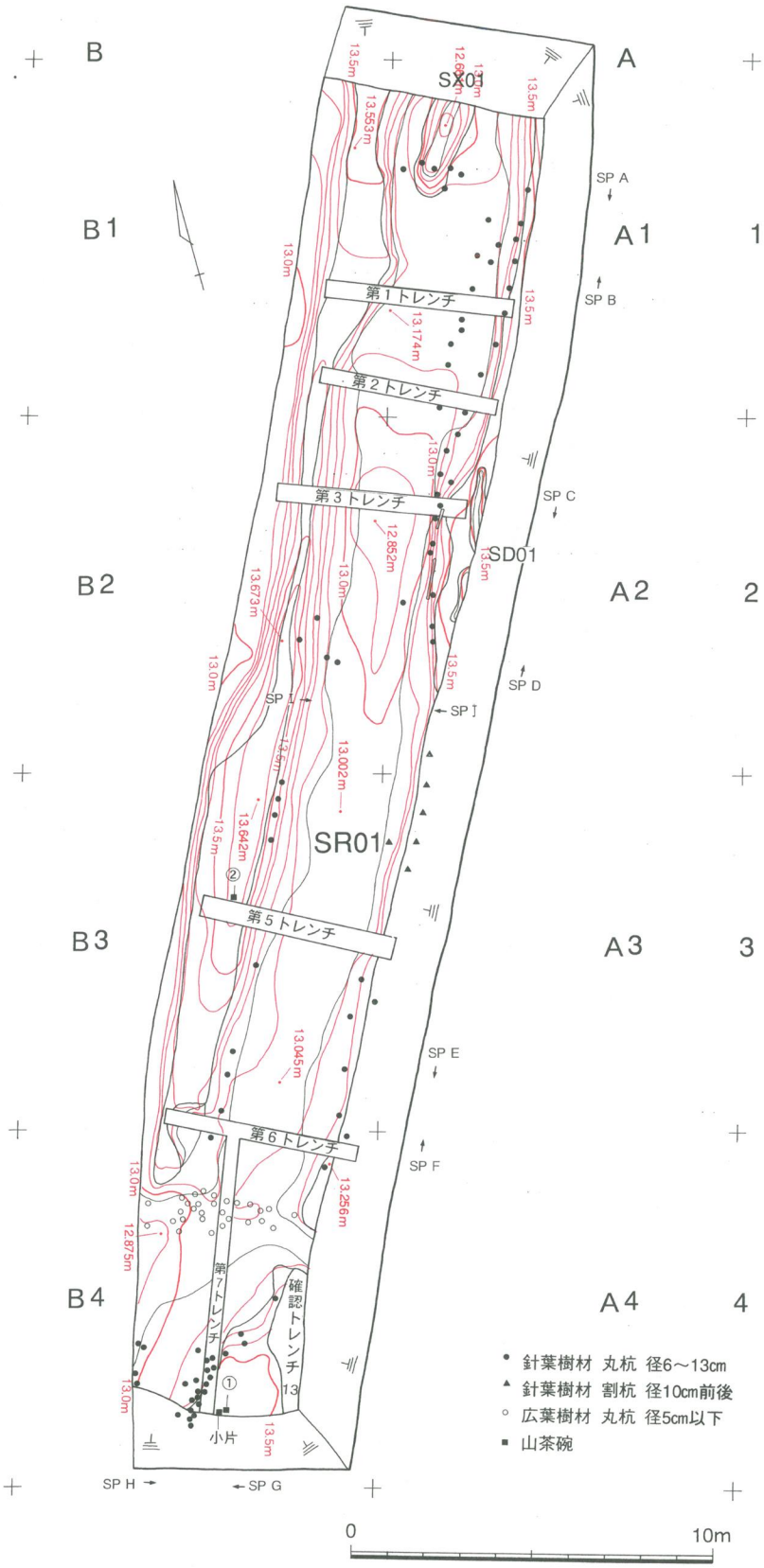
第１節　基本層序と他の土層

調査区およびその周辺の地目は水田と茶畑であり、高低差の少ない平坦な沖積地となっている。茶畑は本来水田であったところに厚く盛土して造成されているが、これは地下水位が高いためであろう。今回調査区は前述のように御領所遺跡の北西端部に位置し、小出川の影響を直接受けてきたことは想像に難くなく、茶畑の造成なども作用して御領所遺跡本来の基本層序が原形をとどめていない怖れを当初より抱いていた。しかし、一部ではあるにせよ本来の基本層序も保たれており、これらを含めて今回調査区内で確認された全ての土層に№１～28の通し番号を付与し、第２表に示した。さらに、第５図において４対のセクションポイントで示した調査区壁面の部分的土層セクション図（第６～９図）および調査区内の第１～７トレンチの土層セクション図（第10～16図）に土層の通し番号を記入し、各土層の切り合い・上下関係を呈示している。
基本層序Ⅰ層（№２層）は耕作土または堤防の表土である。基本層序Ⅱ層（№20層）は近代の水田層で、Ａ１グリッド北部およびＢ４グリッド南部で認められる（第６・９図）。灰黄褐色シルトで、管鉄とマンガン斑を非常に多く含む。Ⅰ層とⅡ層との間に茶畑造成時の盛土（№３～７層）が入るが、土壌構成などから大きく上下２段階に分かれ、５層に分層することができる。ただし、これらの時期差はほとんどないと思われる。基本層序Ⅲ層（№21層）は灰色シルトで、後述するＳＲ01堆積層の上に存在するため、形成時期は近代となる。基本層序Ⅳ層（№23層）は青灰色微砂層で、主に中世の遺物を包含する。この層の上面は本来中世の遺構面であり、今回も一応遺構面として扱っているが、Ⅲ層堆積の直前に遺構面の上部が削平を受け、仮に遺構が存在するとしても当初の上端は失われていると考えられる。Ⅲ・Ⅳ層ともに調査区の北部東壁面と南東コーナー部で僅かに確認されたに過ぎない（第６・９図）。
基本層序Ⅴ層（№25層）は調査区全体に広がっている暗青灰色微砂層であるが、シルトも若干含む。中位～下位部分は灰釉陶器主体の包含層である。№24層（第11図）もⅤ層と基本的に同じ土層であるが、含まれるシルトと有機質の量の差によってⅤ層と区別した。Ⅴ層の直上に、或いはその上部を若干削る形で自然流路ＳＲ01が存在し、その堆積層（№15層）を第６・９・10・15・16図において網掛けで表現

した。基本層序Ⅵ層（№27層）はＳＲ01の西側土堤を形成する砂利層で、色調は暗青灰色を呈する。少量含まれる微砂により、部分的にラミナを形成していることが分かったが、Ⅴ層と大差のない時期の遺物を包含する層でもある。№26層（第13図）はⅥ層と同一視することも可能ではあるが、僅かな色調の違いと微砂の有無によってⅥ層と区別した。また、№28層（第11～13図）はグライ化した微砂層で、古代に属する遺物を包含する。№28層は今回調査において確認した最下の土層であるが、さらにこの下も№24層以下と類似の自然堆積が連続することが想定される。

№10層（第14・15図）および№12層（第16図）は茶畑造成時に盛土される直前に畦道状高まりの表面層を形成していたと推定され、基本層序Ⅱ層とほぼ同時期の土層と考えられる。№18・19層（第11図）はＢ１グリッド南東部（第２トレンチ西端部付近）以北において基本層序Ⅵ層に取って代わる形でＳＲ01西側土堤の上層部分を形成する。また、土質は基本層序Ⅴ層に近似する。

上記の土層以外で、第２表において層名を与えられていない土層は、№15層の堆積完了と茶畑造成との間の時期、すなわち近・現代の土層群ということになる。



第５図　調査区全体図

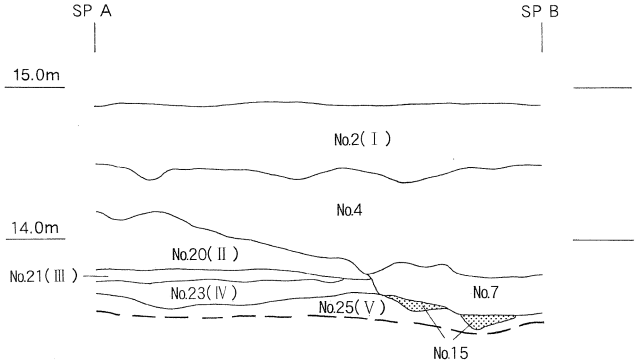
第２節　検出遺構

遺構の概要

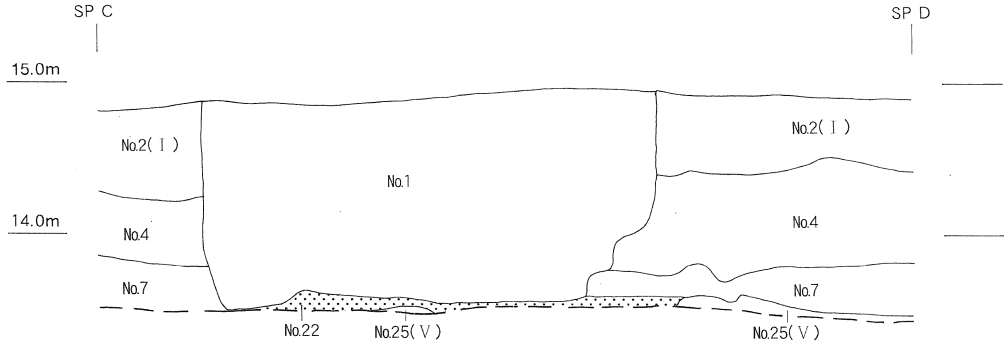
今回調査区は小出川直近ということに加えて自然流路等により御領所遺跡本来の層序が破壊され、検出し得た中世の遺構面は調査区南東コーナー付近を中心に約７㎡、同北東部で10㎡足らずという狭小

土層No.	基本層序	確認調査時の土層名	層名	色調	土壌構成	粘り	締まり	含有物
1			確認調査No.12トレンチ埋土層		No.2・4・7層の混交	ややあり	なし	3～10㎜大カーボン粒やや多量
2	Ⅰ	茶褐色土	表土・耕作土層	5Y4/2（灰オリーブ色）	0.5～3㎝大角礫多量+シルト+微砂+粗砂	ややあり	なし	有機質多量
3			現代盛土上層	5Y4/3（暗オリーブ色）	2～10㎝大角礫多量+シルト+粗砂	あり	やや弱し	10㎜大前後カーボン粒若干
4			現代盛土上層	5BG4/1（暗青灰色）	2～10㎝大角礫+シルト+粗砂	あり	あり	3～10㎜大カーボン粒やや多量
5			現代盛土下層	5Y5/2（灰オリーブ色）	粗砂・3～5㎝大角礫主体+シルト少量	ややあり	ややあり	5～10㎜大カーボン粒若干
6			現代盛土下層	5GY4/1（暗オリーブ灰色）	粗砂・3～5㎝大角礫主体+シルト少量	あり	ほとんどなし	
7			現代盛土下層	5Y5/3（灰オリーブ色）	シルト+粗砂+5～10㎝大角礫	ややあり	弱し	
8				10Y4/1～4/2（灰～オリーブ灰色）	シルト	あり	ややあり	管鉄やや多量
9				5Y4/1～4/2（灰～灰オリーブ色）	シルト	あり	あり	管鉄多量
10			畦道状硬化層	5Y5/1（灰色）	シルト	若干あり	強固	管鉄多量、1～7㎜大カーボン粒やや多量
11				5Y5/1（灰色）	シルト	若干あり	強し	管鉄多量、3～7㎜大カーボン粒やや多量
12			畦道状部分形成層	10G4/1（暗緑灰色）	シルト主体+5～20㎝大円礫若干	やや弱し	あり	管鉄多量、2～5㎜大カーボン粒少量
13				10G4/1（暗緑灰色）	シルト	やや弱し	やや弱し	2～5㎜大カーボン粒少量、木片・朽葉若干
14				5BG4/1～10G4/1（暗青灰～暗緑灰色）	シルト	あり	あり	3～14㎜大カーボン粒やや多量
15			ＳＲ01堆積層	N3/ ～2.5GY3/1（暗灰～暗オリーブ灰色）	粗砂・0.5～5㎝大円礫多量+シルト・微砂少量	なし	なし	半腐朽植物遺体多量
16			ＳＸ01覆土上層	5BG3/1（暗青灰色）	シルト+微砂	あり	ややあり	3～15㎜大カーボン粒少量
17			ＳＸ01覆土下層	10GY4/1（暗緑灰色）	微砂主体+シルト若干	あり	あり	4～5㎜大カーボン粒若干
18			土堤状硬化層	10BG5/1（青灰色）	微砂主体+シルト若干	なし	強し	2～3㎜大カーボン粒若干
19				10BG5/1（青灰色）	微砂主体+シルト若干	ほとんどなし	あり	2～3㎜大カーボン粒若干
20	Ⅱ	Ⅲ：淡黄色粘質土	近代水田層	10YR5/2（灰黄褐色）	シルト	あり	あり	管鉄極めて多量、マンガン斑多量
21	Ⅲ	Ⅳ：暗茶褐色砂質土		7.5Y5/1～10Y5/1（灰色）	シルト	ややあり	やや弱し	管鉄多量、3～8㎜大カーボン粒少量
22			ＳＤ01覆土単層	5BG5/1（青灰色）	微砂主体+シルト若干	あり	あり	管鉄多量
23	Ⅳ	Ⅴ：暗黄灰色砂質土	中世遺物包含層	10BG5/1（青灰色）	微砂	ややあり	ややあり	管鉄多量
24				10BG3/1（暗青灰色）	微砂主体+シルト30％強	あり	あり	有機質多量、2～6㎜のカーボン粒やや多量
25	Ⅴ	Ⅵ：青灰色粘土	ＳＲ01河床形成層	10BG4/1（暗青灰色）	微砂主体+シルト若干	やや弱し	あり	2～18㎜大カーボン粒やや多量、有機質少量
26				5BG3/1（暗青灰色）	粗砂+2～5㎝大円礫	なし	若干あり	
27	Ⅵ		ＳＲ01西側土堤形成層	5BG3/1～10BG3/1（暗青灰色）	粗砂・2～5㎝大円礫主体+微砂少量（ラミナ形成）	なし	ややあり	
28			古代遺物包含層	10BG5/1～4/1（青灰～暗青灰色）	微砂	弱し	あり	5～10㎜大カーボン粒・有機質少量

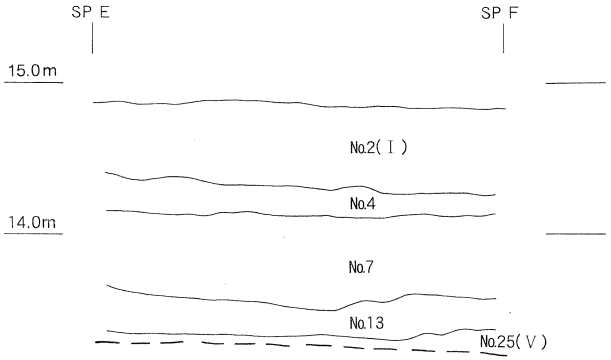
第２表　土層一覧表



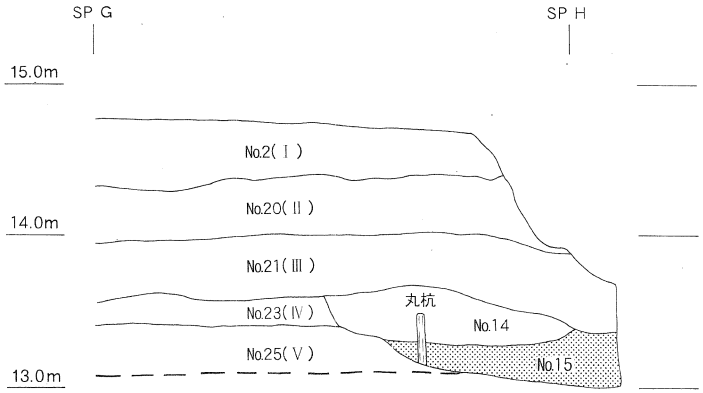
第６図　調査区東壁セクション図　その１（1：50）



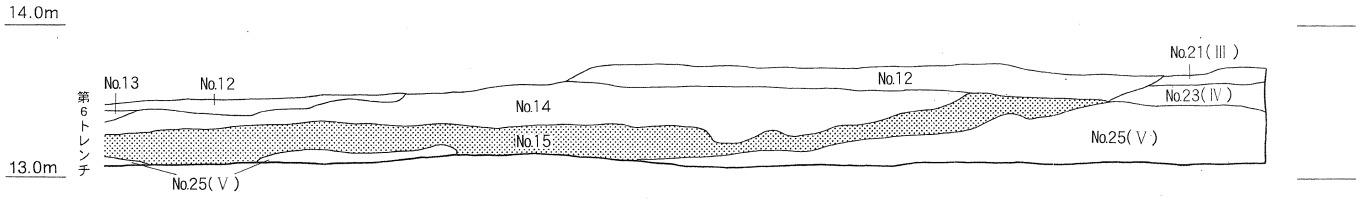
第７図　調査区東壁セクション図　その２（1：50）



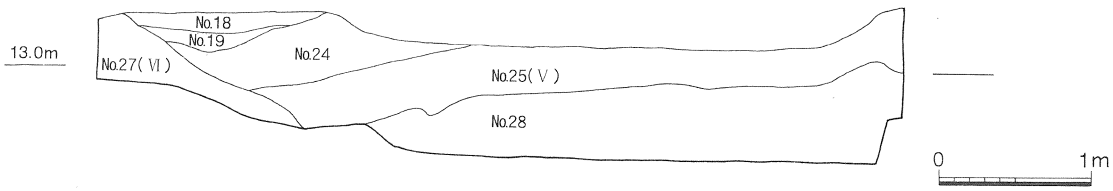
第８図　調査区東壁セクション図　その３（1：50）



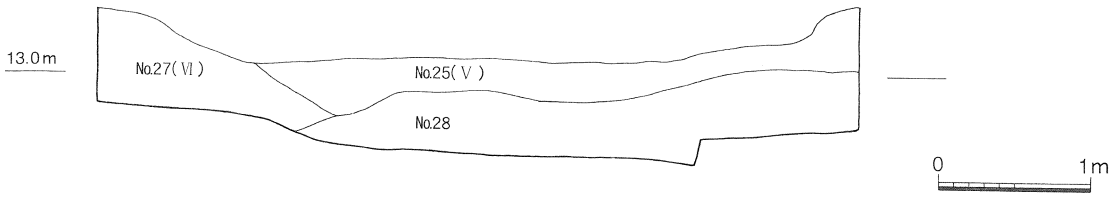
第９図　調査区南壁セクション図（1：50）



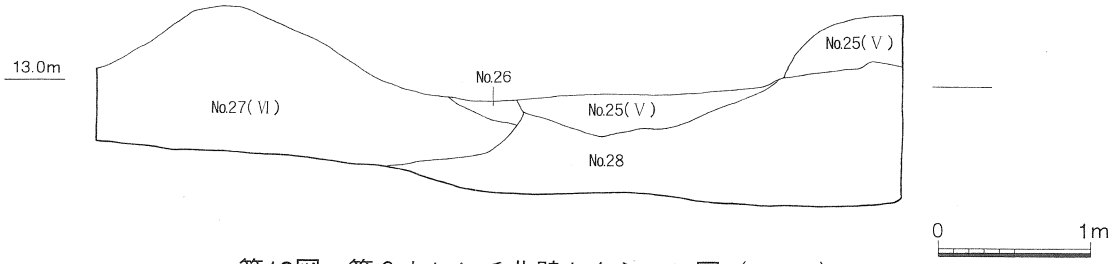
第10図　第７トレンチ東壁セクション図（1：50）



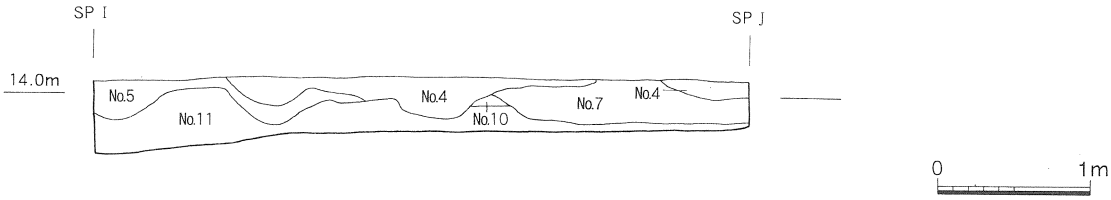
第11図　第１トレンチ北壁セクション図（1：50）



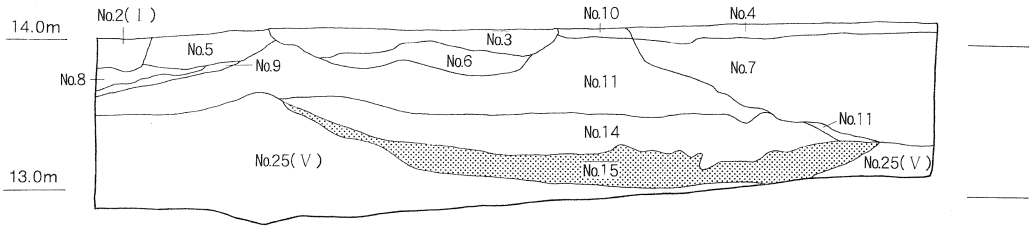
第12図　第２トレンチ北壁セクション図（1：50）



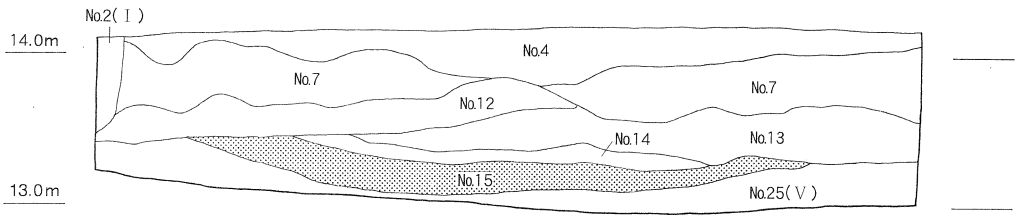
第13図　第３トレンチ北壁セクション図（1：50）



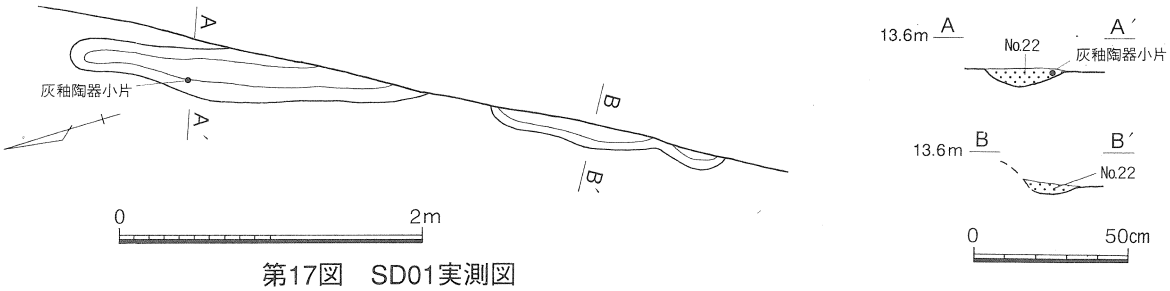
第14図　第４トレンチ北壁セクション図（1：50）



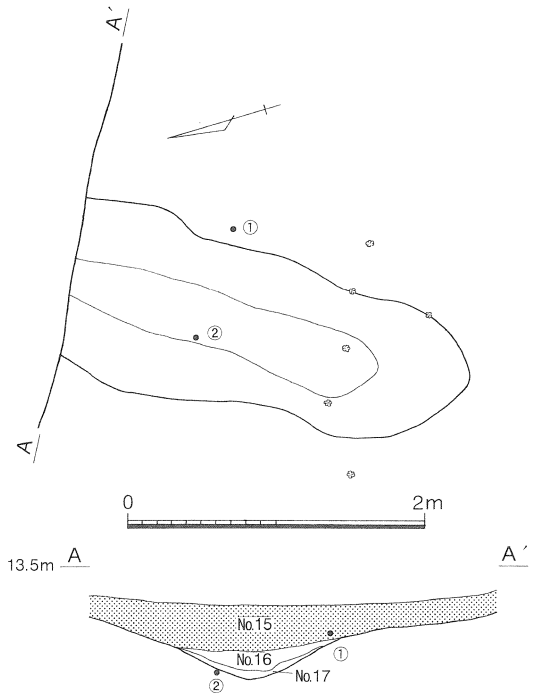
第15図　第５トレンチ北壁セクション図（1：50）



第16図　第６トレンチ北壁セクション図（1：50）



第17図　SD01実測図



第18図　SX01実測図（1：50）

さである。故に、検出された遺構は極めて少なく、自然流路１基、溝状遺構１基、落ち込み状遺構１基を数えるに過ぎない。本節ではこれらの遺構を種類ごとに記載する。

ＳＲ01（第５・９～13・15・16図）

自然流路ＳＲ01は調査区をほぼ南北に縦断し、全体として北北東から南南西へという水流の方向が考えられるが、Ｂ４グリッド北部で西に蛇行する。これは、この付近で西側の土堤が終焉し、Ｂ４グリッド南東部にＳＲ01による破壊を免れた遺構面が若干残存することから判断される。ＳＲ01は調査区外にも南北に連続していると考えられるが、調査区内において検出された総延長は約34ｍを測る。ＳＲ01本来の堆積層が№15層であることは前節で述べた通りであるが、厳密にはＳＲ01に水流が存在した時期に水底の沈澱層として形成された層であり、当土層の厚さを以てＳＲ01の深さとすることはできない。そこで、河床および東西の河岸を構成する№25・27層（Ａ１・Ｂ１グリッドの大部分では№18・24層も含まれる）の上端ラインで表現されるＳＲ01の肩部（上端）と河底（下端）のレベル差こそ、現状ではＳＲ01の最も妥当な深度であると考えられ、それは第３トレンチ付近において最大54㎝となる。また、ＳＲ01の幅は第２トレンチ付近で最大4.5ｍに達する。なお、南区部分において当遺構の幅が計測可能な箇所はほとんどない。

ＳＲ01の河岸のうち、西岸は既述のように「西側土堤」と呼称している。これは、現在の小出川の堤防によってＳＲ01西岸のすぐ近くまで旧来の土層が削り取られ、頂部幅最大1.８ｍの土堤状を呈するに至ったというに過ぎず、従って本来のＳＲ01西岸の姿ではないが、便宜上この名称を用いることにした。Ｂ２グリッド南部およびＢ３グリッドでは西側土堤の東側斜面部分に針葉樹材の丸杭が打ち込まれており、護岸施設の一部と考えられる。東岸は特に北区部分において中世遺構面の下層部分が削平を免れていたため、西岸よりも護岸施設の残存状態は良好であった。Ａ１・Ａ２グリッドにおいては西岸と同じ針葉樹材の丸杭が多数打ち込まれていたが、これらの杭は南北２列の杭列に分けることが可能である。このうち、西側の杭列はＡ１グリッド内に限定され、河岸というよりもむしろ河床に打設されている。この杭列に属する杭は全て河床の検出と同時に発見された、すなわち河床より下層に入っている部分のみが残存していたのであるが、先端からの残存長は15～28㎝を測るにとどまり、打ち込みが相当浅かったか、或いはＳＲ01が埋没しつつあった新しい時期に打ち込まれたかのいずれかであろう。

これに対し、東側の杭列には残存長134cm・河岸面より下の打ち込み深度約１ｍを測るものがあるうえに、第３トレンチの南側では直径10cm前後を測る針葉樹材の横木２本が原位置を保持していた。護岸施設としてはより強固な印象を与えるものである。これら２列の杭列はともに杭の打設間隔が0.3～1.2ｍで、一定していない。これに対し、東岸のＡ３グリッド北半部には針葉樹材の割杭が南北に１列を成し、約0.8ｍのほぼ等間隔に打ち込まれている。これらの割杭は全て残存長120～130cm、河岸面下の打ち込み深度１ｍ以上であることから、ＳＲ01の護岸施設の一部と見做し得る。さらに東岸の南、第５トレンチと第６トレンチとの間には西岸とほぼ同様の密度で針葉樹材の丸杭が残存していた。

ＳＲ01が西へ蛇行する地点では、杭の密集が認められ、西側土堤の南端終焉部分にかかる一群と、調査区南東コーナーに僅かに残存する中世遺構面の西側終焉部に沿う群との２群に大別される。前者は広葉樹材の杭で構成され、調査区内の他の杭よりも細く、河床面下の打ち込み深度は0.3ｍに満たないことから、水流を調整するためのいわゆるシガラミを形成していた可能性がある。後者はより北の東西両岸に打ち込まれていたものとほぼ同様の針葉樹材丸杭で構成され、頑強に打設されているが、その役割についてはシガラミに関連するのか護岸施設の一部であるのか判然としない。以上、ＳＲ01に関連すると考えられる杭について述べてきたが、これらの杭は材種・法量を問わず遺存状態が極めて良好で、炭化などの状況もほとんど見られない。実際にまだ材木として利用できそうなものさえ存在する。故に、これらの打設年代は近世以降の相当新しい時期に比定される可能性が高い。

前述のようにＳＲ01には基本的に北から南という水流方向が推定されるが、通常の水流は極めて緩やかであったと考えざるを得ない。調査区北端における河底レベルは海抜13.2ｍ前後であるのに対し、調査区南部の第６トレンチ付近におけるそれは海抜約13.05ｍであり、およそ30ｍの距離に対する高低差は僅か約15cmにとどまるからである。しかも、Ａ２・Ｂ２グリッドには南北約８ｍにおよぶ流路内凹みが存在し、凹みの上端を海抜13.0ｍラインと仮定すれば、その河底からの深さは約15cmである。渇水になれば、河水は確実にここに溜まることになる。ただし、ＳＲ01が西へ蛇行する地点からは急激に河底が落ち込む状況が窺われる。なお、Ｂ４グリッド北部においてＳＲ01東岸が約１ｍ中断しているが、これは北西－南東方向に走る近・現代の暗渠によって切られているためである。

ＳＲ01の出土遺物に言及する場合、№15層中または河底直上で検出された遺物に限定する。ＳＲ01が自然流路として存在した時期の遺物でなければ無意味であると判断されるためである。このような定義にもかかわらず、出土遺物は須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶碗・近世陶磁器・銭貨と、時期も種類も広範囲に及んでいるが、近世以前に属する遺物は混入品と考えられる。

ＳＤ01（第７・17図）

Ａ２グリッド北半部の調査区東壁沿いにおいて検出した溝状遺構である。調査区壁面の安全を確保する必要があったため、残念ながら全体検出は果たせなかった。よって、平面図では２本の異なる溝状遺構のようにも見えるが、調査区壁面に現れた覆土（№22層。セクション図ではやや密度の低い網掛けで示した。）が平面図における中断部分で連続しているため、当遺構は壁面の奥で連続していると推測され、検出長4.38ｍ、最大幅0.35ｍを測る。遺構として確認された時にはすでに深さ10cmに満たず、調査区壁面に現れた覆土の厚みを加えても深さは20cm未満である。これには、ＳＤ01は本来基本土層Ⅳ層の上面より掘削された溝であったが、Ⅳ層が現代の盛土等のために削平され、底部に近い一部分が残存したということが考えられよう。また、当遺構北部の底面直上にて灰釉陶器の小片１点を検出したが、この遺物がＳＤ01の所属時期を示すものである可能性は疑わしい。それでも、当遺構は概ね中世に比定して大過ないと思われる。

ＳＸ01（第18図）

ＳＲ01の項で言及した「流路内凹み」に似ていなくもないが、覆土の堆積状況や何らかの関連性を帯びた杭群を伴うことなどを考慮し、ここでは遺構として記載する。ＳＸ01はＳＲ01の河底面に上端を有し、南北に長い落ち込み状を呈す。検出長は2.75ｍであるが、調査区北側にも或る程度連続していることが予想される。現状での最大幅は1.25ｍを測る。当遺構に関連する杭は６本検出され、いずれも針葉樹材の丸杭であり、直径６～７㎝を測る。最も南に位置する１本の杭を除いて他の５本は0.4～0.5ｍのほぼ等間隔で打設され、ＳＸ01の主軸に直交する杭列を形成している。６本ともＳＲ01河底面またはＳＸ01底面よりの打ち込み深度は0.2ｍ前後と、相当浅い。覆土については暗青灰色シルト層（№16層）が上位層、暗緑灰色微砂層（№17層）が下位層として堆積し、これら２層はＳＲ01堆積層（№15層）より下位に存在するため、ＳＸ01はＳＲ01より古い遺構とも言えるが、色調や土壌構成では３層とも近似していることなどを考慮すれば、ＳＸ01はＳＲ01の形成初期に掘り込まれた可能性が高い。この時、上記の杭６本も打設されたのであろう。遺構の性格としては、杭群と一体で水流調節の機能を果たしていたと推測される。出土遺物では、底面直下より山茶碗の碗（第18図中の②）が検出された。また、当遺構直上の№15層より志戸呂焼の香炉（第18図中の①）が出土した。

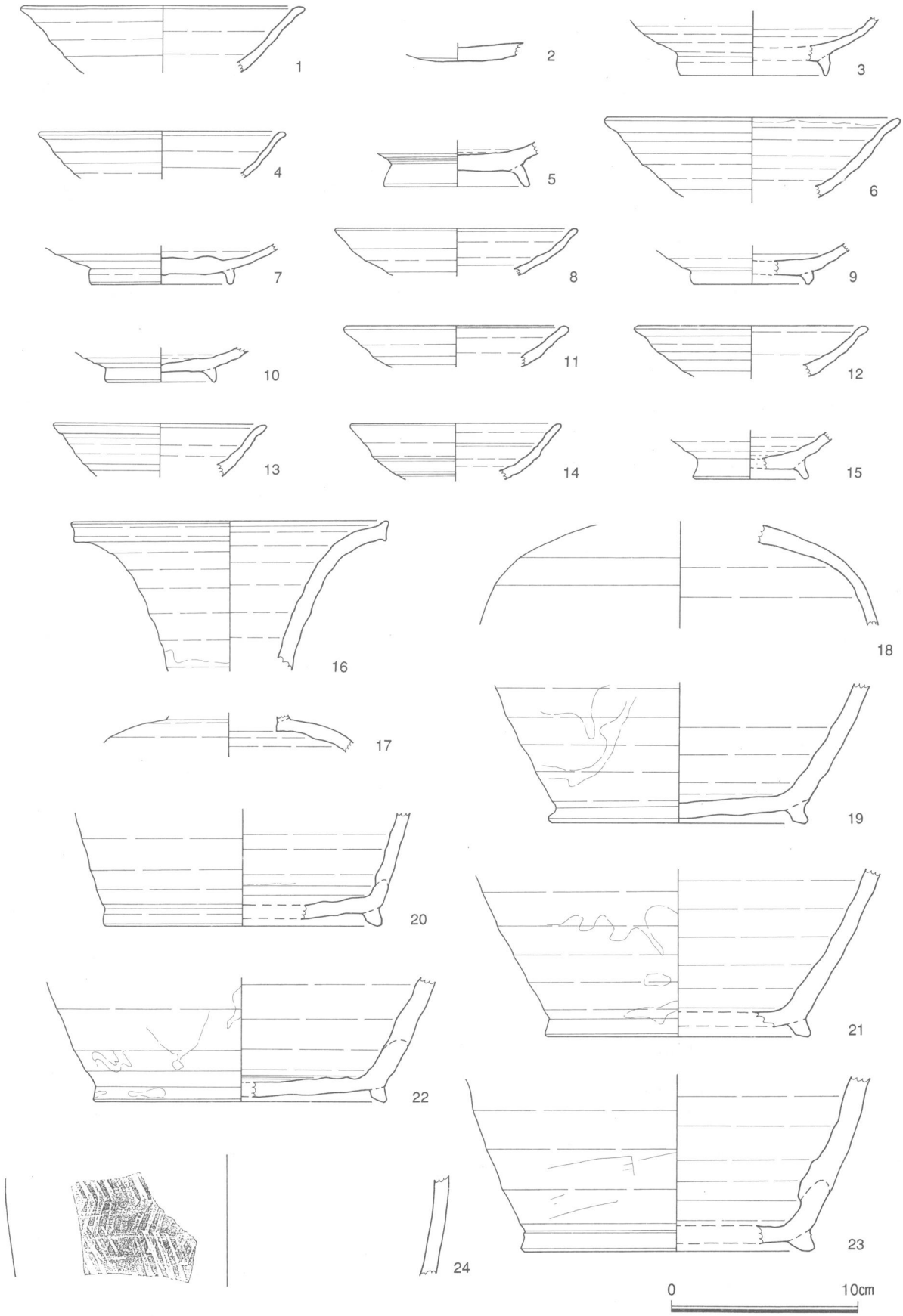
第３節　出土遺物

遺物の概要

今回の調査では、古代から近世にわたる遺物がコンテナ４箱分出土した。遺物には土器、金属製品、石製品があり、このうち土器が９割以上を占める。土器には須恵器、灰釉陶器、山茶碗、土師器、陶磁器があるが、大半は実測・復原不可能な小片となっており、以下に記載する土器は実測可能なものの全てである。金属製品では近世の銭貨が大部分を占め、それ以外では鉄製品と非鉄金属製品が出土している。石製品は１点の出土を見るのみであった。個々の遺物が出土した遺構・地点・層位は第３～６表の遺構・土層番号欄に示した通りであるが、大半の遺物がＳＲ01堆積層（№15層）およびその河床・河岸直下の各層から検出されている。以上の遺物について種類・様式・器種ごとに報告する。

灰釉陶器（第19図）

１～６は碗である。１・４の内面全面および外面口縁部、３の内面全面にハケ塗り施釉が認められ、２は高台欠損の底部片である。５の底部は糸切り後丁寧にナデ調整が施されている。１は色調が他に較べて白く、胎土も精良な優品であることから東海西部地方の製品と考えられ、折戸53号窯式の古い段階に比定される。２は底部中心部に糸切り痕が認められるが、そのすぐ外側の底部には回転篦削りが施され、松井一明氏の編年（松井1989）における宮口古窯跡群灰釉陶器Ⅱ期の特徴と考えられる。３は同じく松井氏編年の清ヶ谷古窯跡群灰釉陶器Ⅲ期１段階に類例がある。４の口縁部は緩やかに外反し、Ⅲ期２段階の特徴を有す。５は塚本和弘氏による編年（塚本1994）の皿山１号窯期に比定され、この段階で在地産の灰釉陶器が出現する。６も皿山古窯跡群の製品と考えられるが、時期は皿山３号窯Ａ群期に位置付けられる。７～12は皿であり、７・８が中遠または西遠地方、９～12が東遠地方の製品と考えられる。７の高台は松井氏編年の灰釉陶器Ⅲ期１段階に帰属し、８の口縁部は同Ⅲ期２段階の属性を有す。また、８の口縁部外面および内面全面にハケ塗り施釉が認められる。９～11は塚本氏編年の皿山２号窯期に類例が求められるが、11は口縁部の外反が不明瞭で、やや新しい時期に下降する可能性がある。12は皿山３号窯Ａ群期に位置付けられる。13～15は小碗であり、皿よりも器高が大きい。13・14は東遠地方以外の窯で焼造された可能性が高く、13は内面にハケ塗り施釉が認められ、灰釉陶器Ⅳ期１段階に比



第19図　灰釉陶器実測図

定される。14は無釉であるが、体部下半を強く回転篦削りしたために沈線状の圧痕が2本認められ、体部の形状から清ヶ谷古窯跡群の編年では灰釉陶器Ⅳ期3～4段階に位置付けられる。15は青灰色を呈し、東遠地方の所産と考えられ、皿山古窯跡群3号窯A群の製品に類例がある。

16・17は長頸瓶である。16は口頸部の外面下半および同内面上半にハケ塗り施釉が認められ、口縁端部の形状から9世紀代の所産と考えられる。17にも同様の年代を比定し得る。18～23は壺である。18は肩部の破片で、外面にハケ塗り施釉が認められる。19～23は底部を含む破片で、ハの字形に開く高台が底面外周端部に貼り付けられている。加えて、これらの高台の接地部が外端面にあるという特徴は須恵器の終末段階においても見られ、故に19～23には概ね9世紀代の年代を与えることができる。このうち、23の高台は端面にスサ痕を顕著に有し、他の4点に較べて断面形が崩れて方形を逸脱しかけているため、退化型式の可能性もあるが、それでも10世紀前葉までに収まると考えられる。また、19は確認調査・12トレンチより出土した破片と接合できた。24は甕の胴部片である。外面には水平方向に羽状の叩き目が残っており、胎土が精良さを欠き、青灰色を呈することなどから在地産の可能性が高い。以上の灰釉陶器の所属する実年代は9世紀から11世紀後半にわたると判断されるが、全体として10世紀前半までのものが多数を占める。上記において東遠地方産または在地産とした製品は皿山古窯跡群の所産であるという推定が許されるならば、皿山開窯以前の搬入品が多いということになろう。なお、今回調査区では輪花碗や確実な深碗の類は確認されていない。

山茶碗（第20・21図）

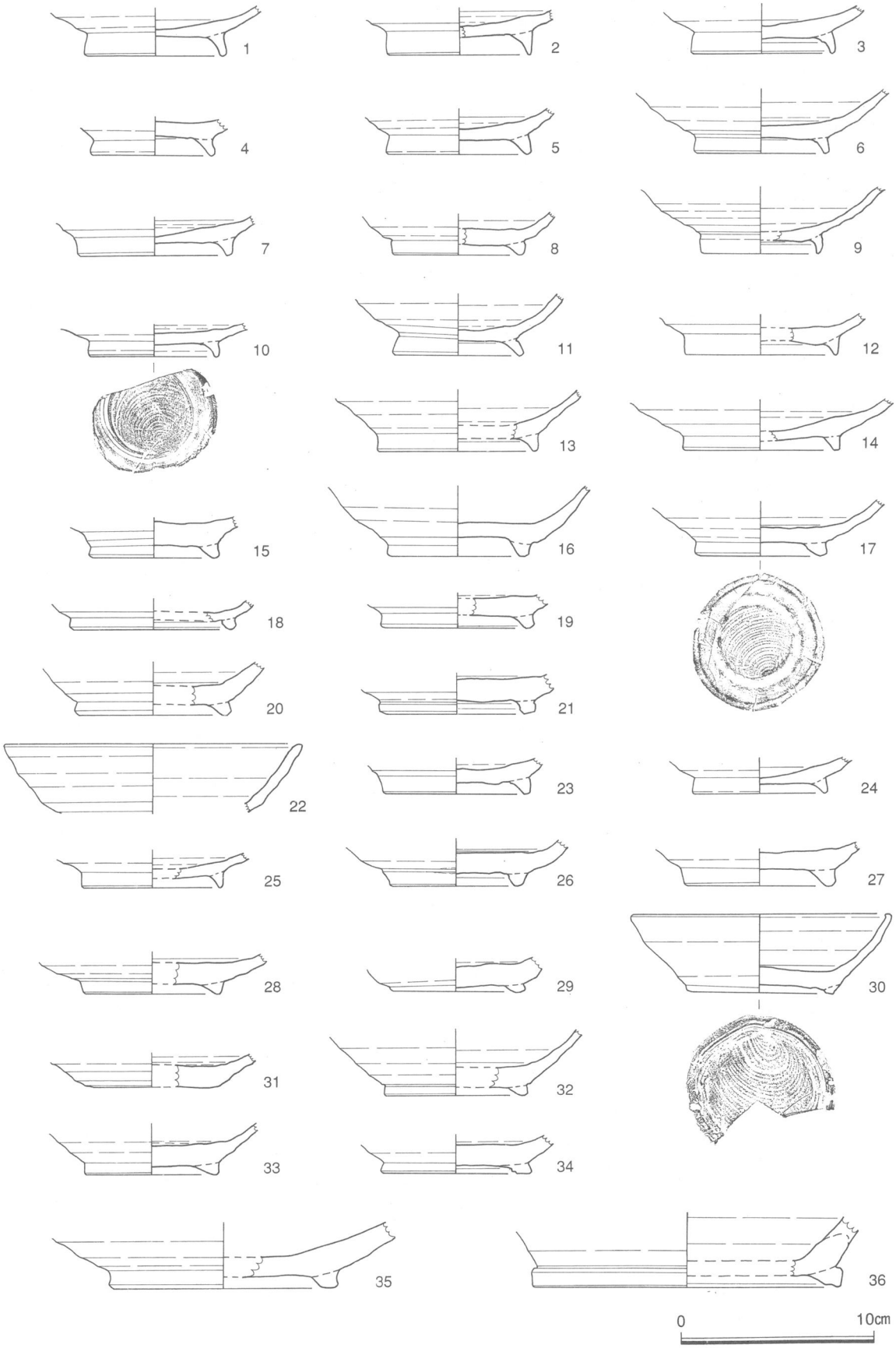
「山茶碗」は中世前期において東海地方一帯で生産された無釉陶器の様式名として広く用いられているが、同時にその中の一器種である「碗」のみを指す言葉としても通用している。これは「山茶碗」が当初「碗」として発見・認識され、その後の編年研究も「碗」を中心に行われてきたという経緯にもよるのであるが、例えば「山茶碗の壺」という表現には誰しも多少の違和感を覚えるであろう。そこで、この種の無釉陶器の呼称として「中世陶器」という様式名が考案され、実際に公式の報文などで使用されている（塚本1999）。ところが、全国的な視点に立てば、中世日本の各地方において施釉・無釉を含めた多種多様な陶器が生産されており、これらの総称としての「中世陶器」との混同は避け難い。こうした事情を考慮すれば、「山茶碗（＝碗）を生産した窯で焼造された複数の器種から成る陶器」の意で「山茶碗窯焼造陶器」という様式名も可能かと考えたが、本書では無用の混乱を避けるため、従来通り「山茶碗」の様式名を踏襲する。当然、この「山茶碗」は狭義の、つまり「碗」という一器種を指す名称ではないということを予め明言しておき、続いて各器種・型式の記述に移る。今回調査で出土した山茶碗は碗・小碗・鉢類・甕などから成り、小皿・輪花碗・仏器の類は全く確認されていない。

1～34は碗である。このうち、1～8は東遠地方産の古い段階に位置付けられ、就中1・2の高台はかなりの高さがあり、接地部（端面）が狭隘なために断面形が細長く鋭角的な三角形を呈し、皿山古窯跡群の編年で言えば3号窯B群期でも古相、或いは灰釉陶器との端境的な型式と見做し得る。3～8の高台の形状にもバリエーションはあるものの、皿山3号窯B群期の範疇で捉えられる。以上の8点の底面は糸切り後主に外周部にナデ調整が施されている。また、高台端面の籾殻圧痕については2・6に若干、8に顕著に認められる。9～13は底面に糸切り後の外周ナデ調整が施され、胎土や色調から中遠地方以西の製品と判断される。9は高い爪形の断面形を呈する高台を貼り付け、松井氏編年の山茶碗Ⅰ期1段階に相当する。10・11の高台はより外に開いて踏ん張る傾向にあるが、同じく山茶碗Ⅰ期1段階に帰属すると考えられる。12・13は高台貼り付け面の幅が広くなり、松井氏編年の山茶碗Ⅰ期2段階に相当し、12は恐らく湖西・渥美古窯跡群の製品であろう。また、11・12の高台端面には籾殻圧痕が認められる。14～18は東遠地方産で、皿山古窯跡群4号窯の製品に類例が求められ、高台端面の籾殻圧痕につ

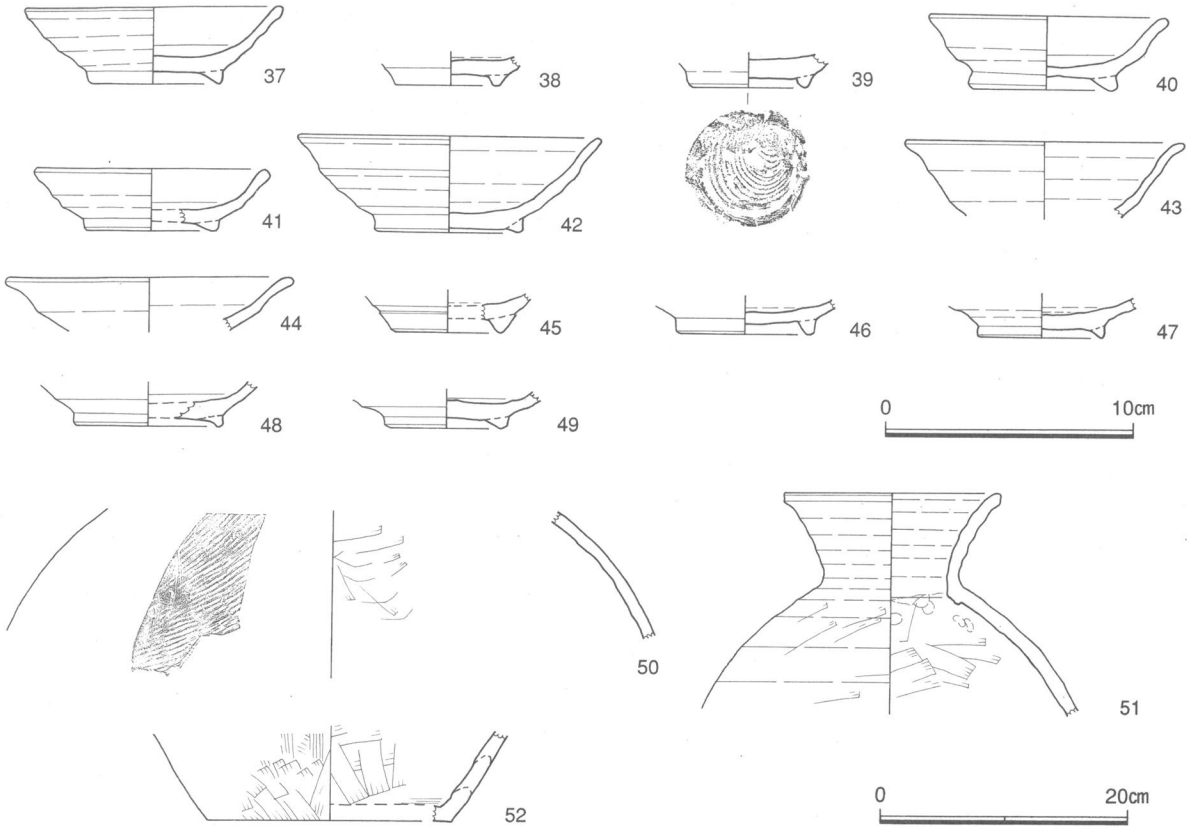
いては14・16が特に顕著である。底面は糸切り後、高台貼り付け部のみナデ調整が施されている。なお、16は第５図中の①であり、中世遺構面直上で検出された。19～21は14～18と同時期に比定し得るが、色調や胎土から西遠地方産と判断される。よって、これら３点は松井氏編年の山茶碗Ⅱ期に帰属させられる。高台端面の籾殻圧痕は19に顕著、20に若干認められ、底面には糸切り後外周部にナデ調整が施されるが、21の底面ナデ調整幅は約２㎝と、広い。22～26は色調等から東遠地方産と判断され、皿山古窯跡群５号窯Ａ群の製品に類例がある。底面は基本的に糸切り後未調整であり、高台端面の籾殻圧痕は23・25で少量、26で顕著に認められる。27は胎土・色調から湖西・渥美古窯跡群の製品である可能性があり、高台は比較的高いが、その貼り付け面の幅も広く、端面に籾殻圧痕が極めて顕著に認められることから、ここでは松井氏編年の山茶碗Ⅲ期１段階に位置付けておく。28～30は典型的な東遠地方産山茶碗の色調を呈し、皿山古窯跡群の編年では５号窯Ｂ群期に属す。28は高台端面の籾殻圧痕が顕著で、高台の貼り付け方も粗雑である。29の高台は小さく扁平である。また、29はＳＸ01より出土し、第18図中の②に対応する。30は復原される口径が13.3㎝と小さく、小碗である可能性も否定できないように見えるが、底径は当該時期の通常の碗と同様であるため、本書では敢えて碗に分類した。底面は糸切り後未調整で、ほとんど痕跡器官のような高台が貼り付けられている。31は高台が欠落し、厳密な年代を決定し難いが、底面の糸切り痕が未調整のまま残されていることや底部の器壁が分厚いことなどから、松井氏編年の山茶碗Ⅲ期に位置付けることができる。32～34は今回調査出土の碗のうち最も新しい時期の特徴を有し、胎土・色調を考慮すれば松井氏編年の湖西・渥美古窯跡群山茶碗Ⅲ期１段階に特定される。

35は一見すると壺類の底部片のようであるが、底部から体部への立ち上がりが緩やかであるため、ここでは鉢類の可能性を考えた。断面が扁平な方形を呈する高台を貼り付け、その端面には籾殻圧痕が認められる。底面は摩滅して調整は不明であるが、高台の形状や器壁の厚さ、そして色調などより皿山古窯跡群５号窯Ｂ群期の製品と推定される。36はこね鉢である。外面下半には回転篦削りが施され、高台は比較的丁寧に作られている。色調から東遠地方産と判断され、年代は12世紀後半～13世紀前半に比定される。37～49は小碗である。37～44は胎土・色調より東遠地方産と判断され、山茶碗では小碗は古い時期に限定されるため、皿山古窯跡群の編年では３号窯Ｂ群期に位置付けられる。37は高台端面に籾殻圧痕が認められ、ＳＲ01西側土堤直下にて出土した（第５図中の②）。42は他の小碗に較べて器高・口径が大きく、碗と小碗との中間的形式として捉えることもできよう。還元炎焼成が不完全であり、不良品であった可能性が高い。45～49は灰白色を呈し、西遠地方産と考えられる。高台の形状より45～47は松井氏編年の山茶碗Ⅰ期１段階、48・49は同Ⅰ期２段階に比定される。50・51は甕である。50は体部上半の破片で、外面には右上斜方向の平行叩き目が残され、内面は叩き締めた後板ナデ調整を施している。51は比較的良好に残存した上半部片であり、口頸部には内外面とも回転ナデ、体部外面には横位の板ナデ、同内面には横位または不整方向の板ナデが施されている。52は大形品の底部片であり、壺または甕と考えられる。高台はなく、内外面ともに横位の板ナデの後縦位の板ナデが施されている。50～52は恐らく在地産であろうが、所属時期を特定することは困難であり、強いて言えば51が皿山４号窯操業以前、すなわち12世紀前半代の可能性があり、50・52は12世紀後半～13世紀前半とも考えたが、判然としない。

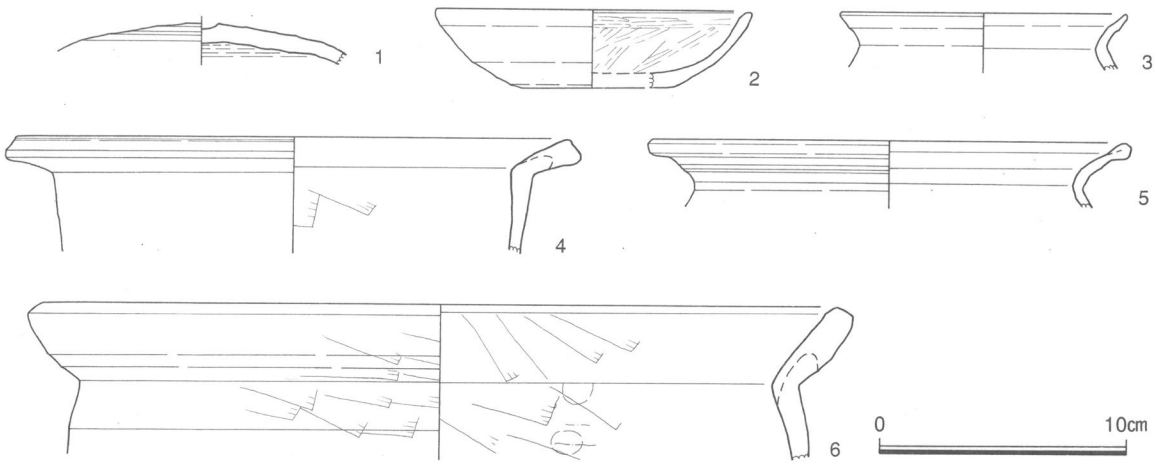
以上の山茶碗のうち、東遠地方産または在地産とした製品のほとんどは皿山古窯跡群で生産されたと推定される。つまり、山茶碗についてはおよそ３分の２が地元の菊川地域で自給されていたことになるのである。また、西遠地方などからの搬入品も在地産の製品もともに12世紀前半に数量的ピークを有するが、13世紀中頃まではいずれも継続的に使用されていたことが窺われる。



第20図　山茶碗実測図　その１



第21図　山茶碗実測図　その２



第22図　その他の古代・中世土器実測図

その他の古代・中世土器（第22図）

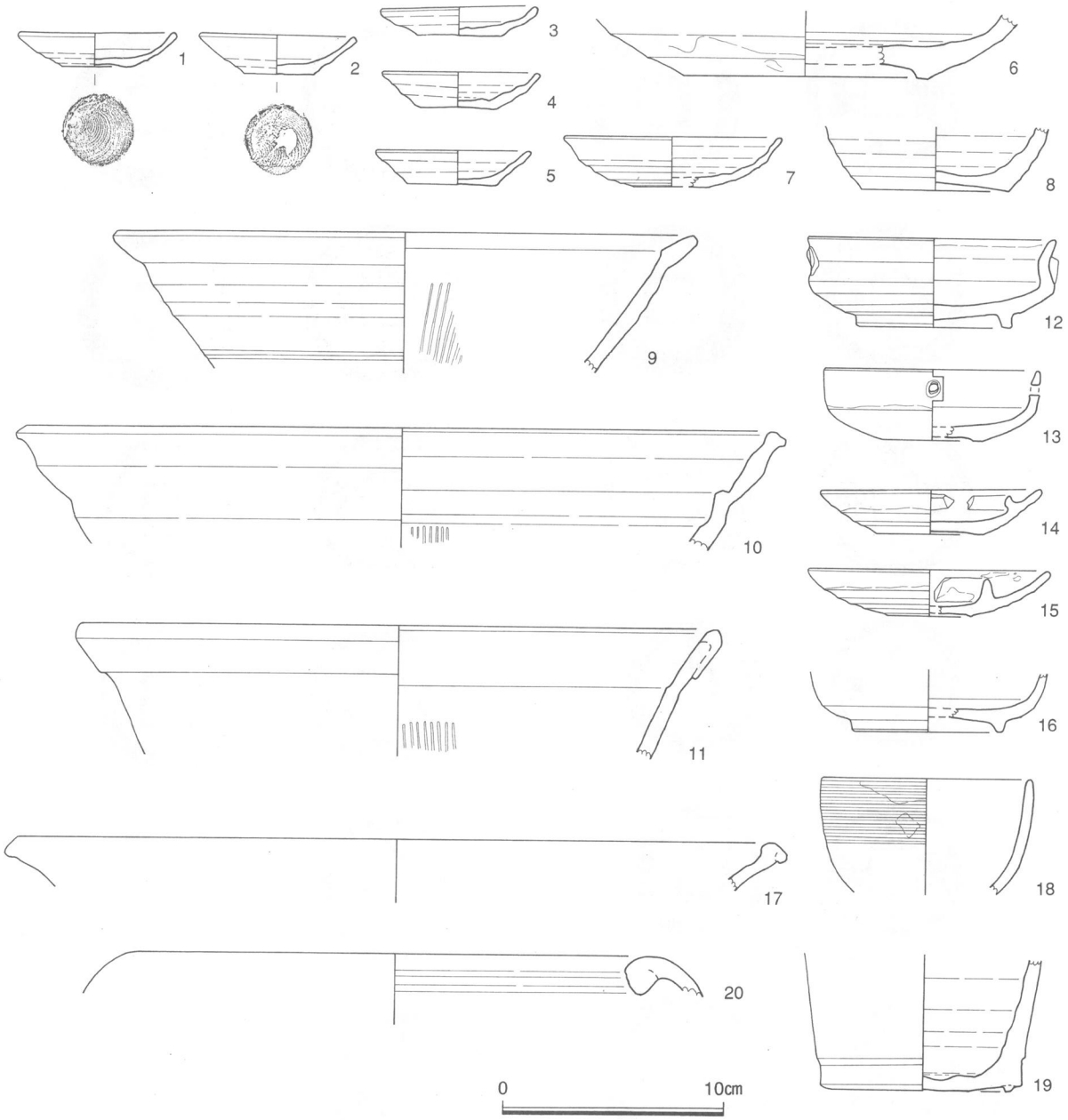
本項では、灰釉陶器および山茶碗以外で古代・中世に所属する土器を一括して記述する。１は須恵器の坏蓋であり、精良な胎土と比較的明るい色調から湖西古窯跡群の製品と判断され、後藤建一氏の編年（後藤1989）によれば坏蓋Ｄｂに特定し得る。当型式は湖西古窯跡群のⅥ期第１小期に属し、９世紀初頭の暦年代が与えられている（後藤1989）。２は内黒土器の坏で、口縁端部を丸く収める。内面は炭素が吸着して暗灰色を呈し、口縁部に横位、体部に縦位で放射暗文状の篦磨きが施されている。外面は一般の土師器と同様の酸化炎焼成による色調を呈す。９世紀代の搬入品であろう。３は恐らく在地産の甕の口縁部片であり、復原される口径からはかなり小形と言える。器表全体の摩滅が激しいが、奈良時代

以降の所産と考えられる。4・6は清郷型鍋（または清郷型甕）である。2点とも全体に器表の摩滅が激しいが、4は体部内面に、6は口縁部および体部の内外面に板ナデが施されている。口縁端部は両者ともナデで調整されているが、作りは4がより丁寧である。復原される口径は4が約22cm、6が約32cmと、著しい差が存在するが、佐野五十三氏が清郷型甕の口径分布について論じた節によると（佐野1990, pp.216-217)、この種の甕（または鍋）の口径は25cm前後を中心に18cmから31cmの範囲に及ぶとされているため、4・6も通常的な在り方と考えられる。所属時期は10世紀後半～11世紀代に位置付けられる。5は伊勢型鍋の口縁部片である。全体的に摩滅しているが、薄手に作った口縁端部を内側に折り返して肥厚させ、屈曲部では長さ約1cmの頸状部分を形成する。これらの特徴から新田　洋氏による編年（新田1985）の鍋4類に特定することができ、当型式の年代は12世紀中葉～後半に比定されている。もっとも5は、鍋4類のうちでもやや口径が小さい製品と考えられる。

近世土器（第23図）

中世よりも新しい時期に所属する土器には土師質土器、磁器、各様式の陶器があり、本項ではこれらを「近世土器」と総称し、様式・器種ごとに記述する。1～5はかわらけであり、この項で取り扱う土師質土器はこれら5点のみである。特に1・2で明瞭に認められるが、1～5全ての底部に糸切り痕が未調整のまま残されている。時期は戦国時代～江戸時代前期すなわち16～17世紀と推定され、恐らく在地産である。6～10・12・13は志戸呂焼である。6は大形の鉢で、高台を削り出しており、16～17世紀の所産と判断される。7は灯明皿である。体部下半は回転篦削りで調整され、赤紫色の鉄釉が内外面全面に及ぶ。時期は17～18世紀に比定し得る。8は徳利で、底径および体部の立ち上がりから推定される容量を勘案すれば五合徳利かと思われる。外面は接地部より上2.2cmまで回転篦削り、それより上方では回転ナデで調整されている。厳密な年代は不詳であるが、江戸時代の範囲に収まると考えられる。9・10は擂鉢である。9の口縁部内面には炭化物が付着している。法量差および口縁部の形態差こそあれ、2点ともに17～18世紀に位置付けられる。12・13は香炉である。12はＳＸ01にて出土し、第18図において①で示した。断面方形の安定した高台を有し、体部中央の稜より上は内傾しつつ、口縁部を外反させる。また、体部上半の凹状部に直径1.3cmの円形浮文を2箇所貼り付ける。外面は高台接地面より上1.5cmまでは回転篦削りで調整し、この部分は鉄釉が掛からない露胎となっている。所属時期は江戸時代前期すなわち17世紀に比定される。13は口縁部直下に直径0.5cmの焼成前穿孔が認められ、内面口縁部および外面上半のみ鉄釉を掛け、外面下半は露胎である。高台は削り出しであるが極めて低平で、むしろ底面中央部の上げ底と見做すべきかもしれない。時期は19世紀代に比定される。

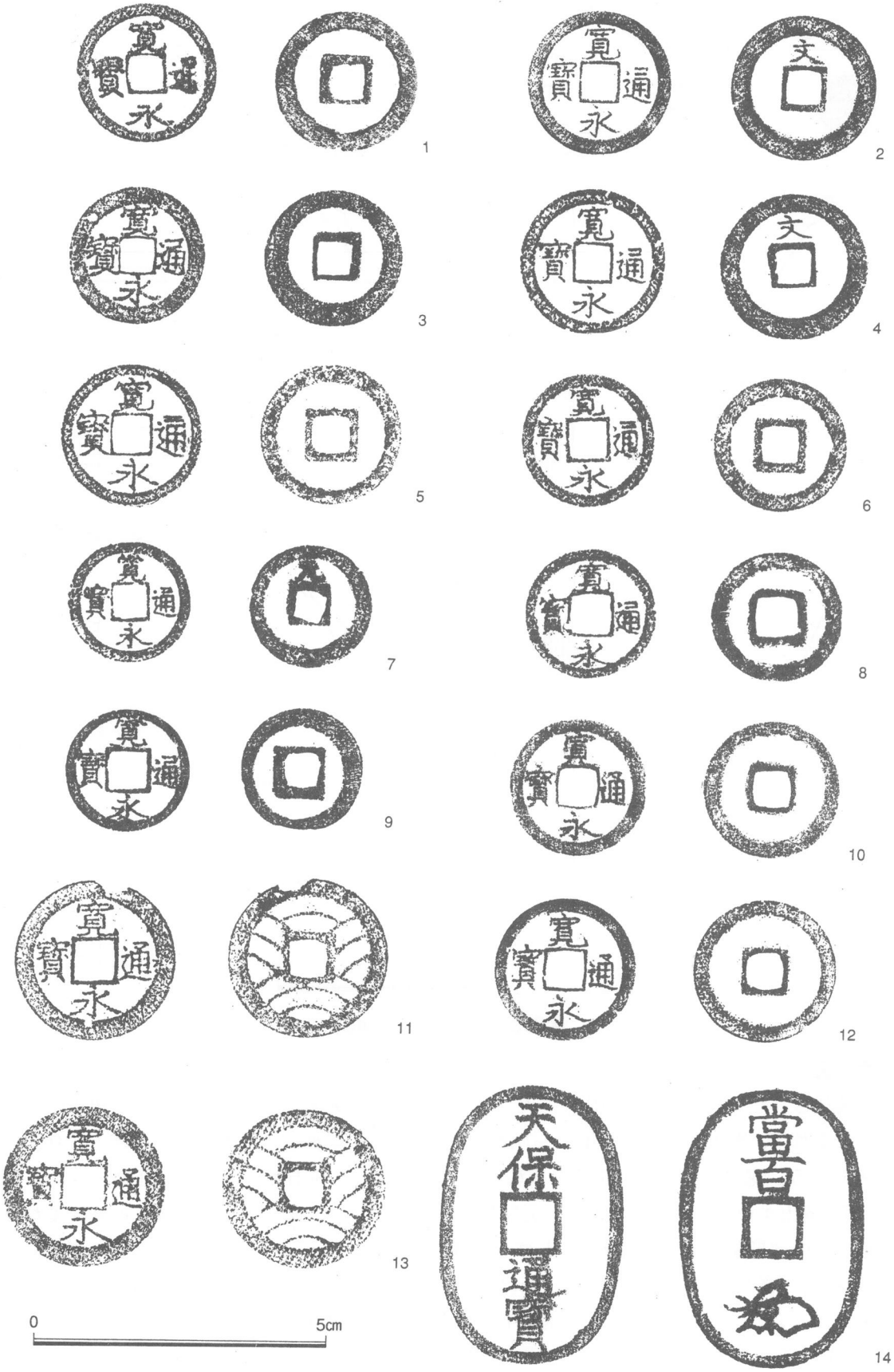
11・17～19は瀬戸・美濃焼である。11・17は擂鉢で、前者は18世紀代におけるメジャーな型式である。後者は18世紀前半に位置付けられ、当該時期においてはマイナータイプと考えられる。18は丸碗であるが、志戸呂窯の陶工が瀬戸焼の同器種を模倣した製品である可能性が高い。内面全面および外面口縁部に鉄釉または飴釉が施され、外面の大部分に浅黄色の釉が掛けられている。体部外面上半には17本の沈線が入る。時期は江戸時代後期すなわち18世紀後半～19世紀中葉に比定される。19はいわゆる貧乏徳利で、恐らく5合入りと考えられる。底面中央部に直径約4.5cmの糸切り痕がほとんど未調整のまま残存し、その周囲を溝状に削り込み、溝状部分の外端部、つまり底面外縁より約0.5cm内側に貧弱な高台を貼り付けている。内外面全面に施釉され、時期は江戸時代後期と考えられる。14・15は信楽焼の灯明受皿である。2点とも内面全面および外面体部上半が施釉され、内面には油と煤が固着している。さらに、体部外面下半を篦削りで調整し露胎としていることも共通している。16は瀬戸磁の皿で、文様・絵付けはなく、江戸時代後期に比定される。20は火鉢の口縁部片で、胎土・焼成より三河地方の製品と判断され、19世紀代に位置付けられる。



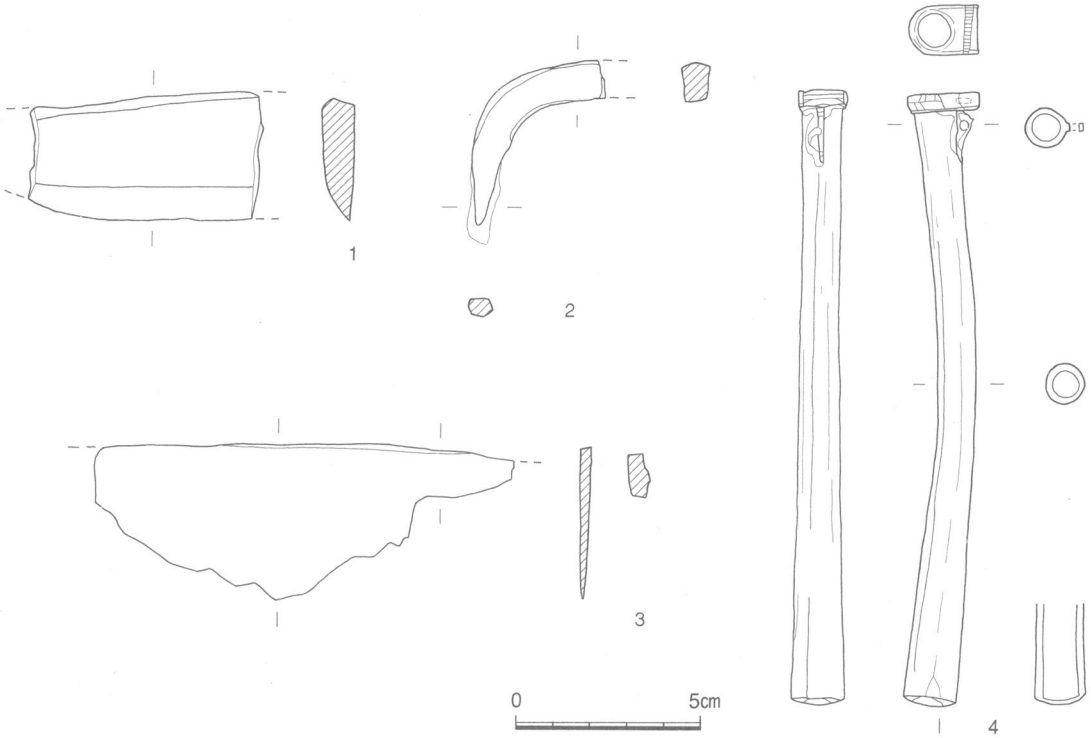
第23図　近世土器実測図

銭貨（第24図）

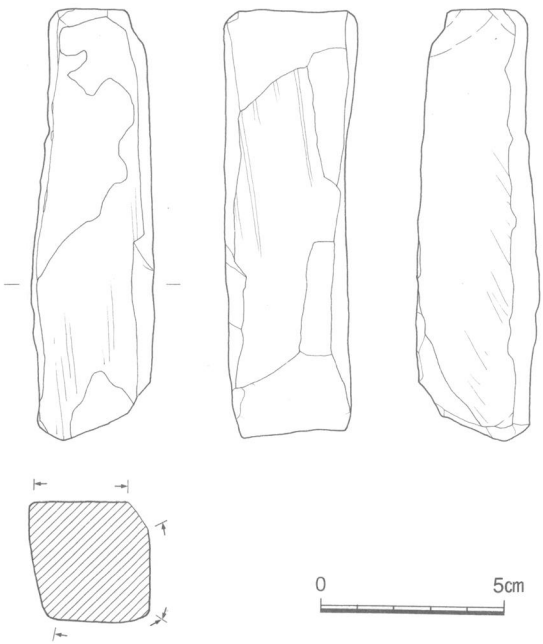
近世に鋳造された方孔銭が計14点出土した。うち、13点が寛永通宝である。永井久美男氏の編年（永井1997）によれば、寛永13年（1636年）～万治２年（1659年）に鋳造されたものがⅠ期となり、いわゆる古寛永である。寛文８年（1668年）～天和３年（1683年）に鋳造されたものはⅡ期とされ、背面に「文」の字を鋳出すいわゆる文銭である。元禄10年（1697年）～天明元年（1781年）の鋳銭またはⅠ・Ⅱ期以外のものはⅢ期となり、狭義のいわゆる新寛永である。１・３・５は「寛」字の12画目と13画目の頭が相接し、「寶」字の「貝」部５～７画目が「ス」の字形となっており、これらはⅠ期の特徴である。２・４は「文」の背文字を有し、Ⅱ期に比定される。６～10・12は「寛」字の12画目と13画目の頭が離れ、「寶」字の「貝」部６・７画目が「ハ」の字形であり、これらはⅢ期の特徴である。このうち、７は背面に「元」の字を鋳出しているが、これによって、いわゆる高津銭に特定される。何となれば、元文５年（1740年）に大坂の高津町付近に天王寺村銭座が設置され（竹内ほか1983, p.467)、「元」字



第24図　銭貨拓影図



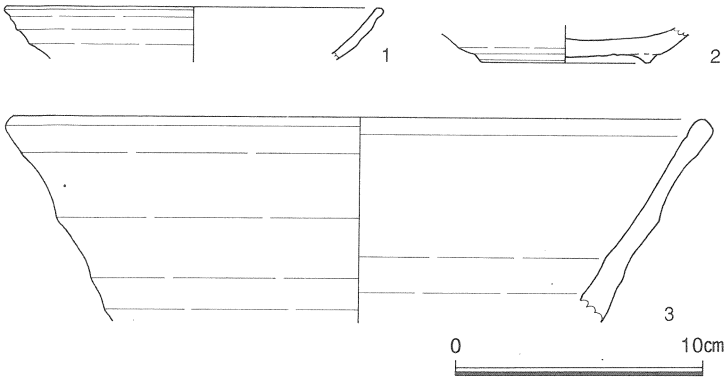
第25図　金属製品実測図



第26図　石製品実測図

は元文という年号に由来していると考えられるからである。上記の1～10・12は銅銭であるが、11・13は真鍮製の四文銭である。背面の文様により濤銭とも呼称される。2点とも他の寛永通宝より一回り大きく、背面に十一波文様を有す。四文銭の鋳造は明和5年（1768年）～天明8年（1788年）に行われたが、当初は背面に二十一波文様を付していたものの、鋳造工程における型抜きに問題があったため、明和6年（1769年）には十一波文様に改正された（滝澤・西脇1999, p.192）。従って、11・13は明和6年以降の鋳銭ということになり、Ⅲ期に比定される。14は天保通宝である。天保通宝は天保6年（1835年）に百文銭として発行され、銅78%・錫10%・鉛12%の合金と定められていた（滝澤・西脇1999, p.194）ので、14も鉛を多く含有する青銅製と推測される。背面の上部に「當百」、同下部には17世紀以来幕府により銭貨鋳造を独占的に請け負わされた後藤家のものと思われる花押が鋳込まれている。遺跡出土の類例は意外に少なく、比較的近い地域では近世東海道の日坂宿に比定されている掛川市清水遺跡より1点出土している（足立1996）。

以上14点の銭貨は、11の上縁部に若干の欠損を見る以外は遺存状態が非常に良好であり、緑青などが析出したものはなく、鋳出された文字・文様も鮮明である。寛永通宝では特に2・4の作りが優れており、Ⅱ期の文銭は徳川幕府が発行した銭貨の中で最も良質の一文銭であるという見解（永井1997, p.99）



第27図　確認調査出土遺物実測図

に合致する。ほとんどが自然河川の水底堆積層より出土したにもかかわらず、破損、変形、そして手擦れさえあまり認められないという観察結果は、これらの銭貨が久しく市場に流通することもなく御領所遺跡或いはその近隣の一角で隠匿されていたことを暗示しているのであろうか。なお、上記14点の江戸時代における価値総額は119文となる。

金属製品（第25図）

本項では銭貨以外の金属製品について記述する。1～3は鉄製品である。1は片刃の刃物の破片である。図では左側が右側に比して次第に細くなる傾向にあり、失われた左方部分に切先を有する刀状の利器の可能性を考えたが、現時点では性格不明とせざるを得ない。2は鎹の破片と考えられ、片側の先端が残存している。断面は方形で、比較的堅牢な印象を受ける。3は刃物の茎から身にかけての破片であり、切先・刃部・関は欠損しているが、身の薄さなどから庖丁状を呈するとも言える。しかしながら遺存状態が劣悪で、やはり器種を特定できない。4は真鍮製の矢立てである。本体はほぼ完存し、長16.8㎝、内径は平均約1㎝を測る。同じく真鍮製と想定される墨壺部分は失われ、本体も土圧等の影響により彎曲し、筆の挿入はもはや不可能となっている。この携帯文房具は前項の天保通宝と同様に、近世の都市遺跡でさえも多くの出土例を見ない遺物である。以上の金属製品の所属時期は近世を大きく遡るものではないと推測される。

石製品（第26図）

石製品では図示した砥石1点のみが出土している。方柱形を呈し、使用痕は3面に残り、その方向は砥石の主軸に平行または斜交する。全長11.9㎝、最大幅3.65㎝を測る。両小口部を中心に欠損が顕著に認められるが、本来の法量と大きく異なるものではないと考えられる。材質は凝灰岩である。大きさや形状から中砥としての用途が想定される。所属時期は中世以降である可能性が高い。

確認調査出土遺物（第27図）

菊川町教育委員会により実施された御領所遺跡の確認調査のうち、今回の調査区に係る部分において出土した遺物について報告の責を果たすべく、ここに一項を設けた次第である。1は灰釉陶器の碗である。№13トレンチより出土し、出土層位は基本層序Ⅳ層である。施釉はなく、在地産と考えられ、皿山古窯跡群の編年では3号窯A群期に位置付けられる。2は山茶碗の碗である。№12トレンチの基本層序Ⅴ層より出土した。青灰色を呈する典型的な東遠地方産で、底部に未調整の糸切り痕を残し、低平な高台を貼り付けている。時期は皿山5号窯B群期に比定し得る。3はこね鉢である。№13トレンチの基本層序Ⅳ層より出土した。山茶碗の一器種として大過ないと思われる。胎土・色調より東遠地方産ではないと考えられ、概ね12世紀後半～13世紀前半の年代が付与されよう。上記以外にも確認調査№12・13トレンチでは土師質土器の細片などが数点出土しているが、実測不可能なため、本項では図示していない。また、確認調査地点では御領所遺跡本来の層序が比較的良好に保持されていることを考慮すれば、上記2の碗は後世の混入品である可能性も否定できない。

挿図	遺構・土層番号	様式	器種	口径cm	底径cm	器高cm	色調	残存	備考	写真図版
19-01	ＳＲ01　西側土堤中　27	灰釉陶器	碗	(14.7)			7.5Y7/1灰白色	底部、体部わずかに残存	ハケ塗り施釉	06-06
19-02	ＳＲ01　15	灰釉陶器	碗		2.45		7.5Y7/1灰白色	底部のみ残存	自然釉	07-01
19-03	ＳＲ01　15	灰釉陶器	碗		(7.7)		5PB5/1青灰色	底部、体部1/3弱残存	ハケ塗り施釉	07-01
19-04	ＳＲ01直下　25	灰釉陶器	碗	(12.9)			N7/ 灰白色	口縁部わずかに残存	ハケ塗り施釉	06-06
19-05	ＳＲ01　15	灰釉陶器	碗		(7.4)		7.5YR 6/3にぶい褐色	底部1/3～体部わずかに残存	自然釉	07-01
19-06	ＳＲ01　15	灰釉陶器	碗	(15.5)			5Y7/1灰白色	底部、体部わずかに残存	自然釉	06-06
19-07	ＳＲ01　15	灰釉陶器	皿		7.3		5Y7/1灰白色	底部～体部わずかに残存	自然釉	07-01
19-08	ＳＲ01　15	灰釉陶器	皿	(12.7)			7.5Y7/1灰白色	底部、体部1/4弱残存	ハケ塗り施釉	06-06
19-09	排土中	灰釉陶器	皿		(6.2)		N7/灰白色	底部、体部わずかに残存		07-01
19-10	ＳＲ01　15	灰釉陶器	皿		(5.6)		7.5Y7/1灰白色	底部1/4残存		07-01
19-11	ＳＲ01直下　25	灰釉陶器	皿	(11.7)			N7/ 灰白色	底部、体部1/4弱残存	自然釉	06-06
19-12	ＳＲ01直下　25	灰釉陶器	皿	(12.1)			N7/ 灰白色	底部、体部わずかに残存	自然釉	06-06
19-13	ＳＲ01　15	灰釉陶器	小碗	(11.1)			7.5Y8/1黄灰色	底部、体部わずかに残存	ハケ塗り施釉	06-06
19-14	ＳＲ01直下　25	灰釉陶器	小碗	(11.0)			7.5Y7/1灰白色	底部、体部わずかに残存		06-06
19-15	ＳＲ01　15	灰釉陶器	小碗		(5.8)		5B6/1青灰色	底部～体部1/4残存		07-01
19-16	第3トレンチ　25	灰釉陶器	長頸瓶	(16.6)			7.5Y7/1灰白色	口縁部、頸部わずかに残存	ハケ塗り施釉　自然釉	06-05
19-17	第2トレンチ　15	灰釉陶器	長頸瓶				N7/灰白色	肩部わずかに残存	自然釉	06-05
19-18	中世遺構面直下　25	灰釉陶器	壺				7.5Y7/1灰白色	肩部わずかに残存	ハケ塗り施釉	06-05
19-19	中世遺構面直下　25	灰釉陶器	壺		(13.5)		5Y7/1灰白色	底部、胴下半部1/2残存	自然釉	06-02
19-20	ＳＲ01　15	灰釉陶器	壺		(14.4)		5Y7/1灰白色	底部～胴下半部わずかに残存		06-04
19-21	中世遺構面直下　25	灰釉陶器	壺		(13.8)		5Y7/1灰白色	底部、胴下半部わずかに残存	自然釉	06-03
19-22	第2トレンチ　28	灰釉陶器	壺		(15.15)		5Y7/1灰白色	底部1/4～胴下半部わずかに残存	自然釉	06-04
19-23	ＳＲ01　15	灰釉陶器	壺		(15.1)		N7/ 灰色	底部～胴下半部わずかに残存	スサ痕	06-01
19-24	ＳＲ01　西側土堤中　27	灰釉陶器	甕				N7/ 灰白色	胴部わずかに残存		06-04
20-01	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(7.1)		5B6/1青灰色	底部～体部1/2弱残存		08-03
20-02	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(7.2)		5 BG6/1青灰色	底部1/2弱残存	籾殻痕	08-02
20-03	ＳＲ01　西側土堤中　27	山茶碗	碗		(7.2)		10BG6/1青灰色	底部～体部1/2弱残存		08-03
20-04	ＳＲ01　西側土堤中　27	山茶碗	碗		(6.1)		10BG5/1青灰色	底部のみ残存		08-01
20-05	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(7.15)		N7/灰白色	底部～体部2/3残存		07-07
20-06	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(6.7)		5PB6/1青灰色	底部～体部1/2残存	籾殻痕	07-07
20-07	中世包含層中　21	山茶碗	碗		(7.6)		5 B6/1青灰色	底部1/2弱残存		08-03
20-08	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(6.6)		5 B6/1青灰色	底部1/2弱残存	自然釉　籾殻痕	08-02
20-09	ＳＲ01直下　27	山茶碗	碗		(5.8)		10BG7/1明青灰色	底部1/2弱～体部1/4弱残存		08-02
20-10	現代盛土中　4	山茶碗	碗		(6.5)		N6/ 灰色	底部、体部1/2残存		08-03
20-11	ＳＲ01直下　25	山茶碗	碗		6.5		5Y7/1灰白色	底部～体部わずかに残存	籾殻痕	07-07
20-12	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(7.8)		7.5Y7/1灰白色	底部、体部わずかに残存	籾殻痕	08-04
20-13	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(8.1)		7.5Y7/1灰白色	底部～体部わずかに残存	自然釉	08-04
20-14	近代以降堆積土中　13	山茶碗	碗		(7.9)		5 B6/1青灰色	底部1/2弱残存	自然釉　籾殻痕	08-02
20-15	ＳＲ01　西側土堤直上　11	山茶碗	碗		6.3		5Y7/1灰白色	底部のみ残存	籾殻痕	08-01
20-16	中世遺構面直上　21	山茶碗	碗		6.9		10BG6/1青灰色	底部～体部1/3残存	籾殻痕	07-07
20-17	現代盛土中　4	山茶碗	碗		6.2		5B6/1青灰色	底部～体部1/3残存	籾殻痕	07-07
20-18	ＳＲ01直下　26	山茶碗	碗		(8.1)		5PB7/1明青灰色	底部～体部わずかに残存		08-04
20-19	ＳＲ01　西側土堤直上　11	山茶碗	碗		(7.4)		7.5Y7/1灰白色	底部1/2残存	籾殻痕	08-02
20-20	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(7.6)		N7/ 灰白色	底部、体部わずかに残存	籾殻痕	08-04
20-21	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(6.8)		2.5Y7/2灰黄色	底部1/2残存		08-03
20-22	ＳＲ01　15	山茶碗	碗	(15.3)			10BG6/1青灰色	口縁部、体部わずかに残存		08-04
20-23	第3トレンチ　27	山茶碗	碗		7.4		10BG5/1青灰色	底部のみ残存	籾殻痕	08-01
20-24	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(6.6)		5B7/1明青灰色	底部1/4残存		08-03
20-25	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(7.1)		5B5/1青灰色	底部1/2弱残存	籾殻痕	08-04
20-26	排土中	山茶碗	碗		6.4		5PB7/1明青灰色	底部のみ残存	籾殻痕	08-01
20-27	第7トレンチ　15	山茶碗	碗		7.3		2.5Y7/1灰白色	底部のみ残存	自然釉　籾殻痕	08-01
20-28	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(6.9)		5BG6/1青灰色	底部～体部1/2弱残存	籾殻痕	08-04
20-29	ＳＸ01　17	山茶碗	碗		6.5		5B6/1青灰色	底部残存		08-01
20-30	ＳＲ01　15	山茶碗	碗	(13.3)	7.4	4.05	5B5/1青灰色	底部2/3～体部、口縁部わずかに残存		07-02
20-31	ＳＸ01　16	山茶碗	碗		(6.1)		N7/ 灰白色	底部1/3残存	自然釉	08-02
20-32	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(7.2)		N7/ 灰白色	底部わずかに残存	自然釉　籾殻痕	08-04
20-33	ＳＲ01　15	山茶碗	碗		(6.6)		5PB7/1明青灰色	底部～体部1/4残存	自然釉	08-03
20-34	現代盛土中　4	山茶碗	碗		(7.6)		N7/ 灰白色	底部1/2弱残存		08-03
20-35	ＳＲ01　15	山茶碗	鉢？		(11.3)		10BG6/1青灰色	底部1/4残存	籾殻痕	08-05
20-36	ＳＲ01　15	山茶碗	こね鉢		(15.8)		5B6/1青灰色	底部わずかに残存		08-05
21-37	ＳＲ01　西側土堤直下　25	山茶碗	小碗	10.1	5.1	3.1	10BG6/1青灰色	完形	籾殻痕	07-04
21-38	ＳＲ01　15	山茶碗	小碗		(4.1)		5B6/1青灰色	底部のみ残存		08-06
21-39	第7トレンチ　15	山茶碗	小碗		(4.5)		10BG6/1青灰色	底部残存～高台1/2残存		08-06
21-40	ＳＲ01　西側土堤直下　13	山茶碗	小碗	9.4	3.0	5.7	N7/ 灰白色	完形		07-05
21-41	ＳＲ01直下　27	山茶碗	小碗	(9.1)	(5.1)	2.5	5B6/1青灰色	底部1/3、体部～口縁部わずかに残存	自然釉	08-07
21-42	中世遺構面直下　25	山茶碗	小碗	(12.0)	3.9	(5.7)	5Y8/1灰白色	底部1/2～体部、口縁部1/4弱残存		07-03
21-43	ＳＲ01　西側土堤直下　27	山茶碗	小碗	(11.0)			5B6/1青灰色	底部～体部1/6残存		08-07
21-44	表採	山茶碗	小碗	(11.9)			5PB5/1青灰色	口縁部～体部わずかに残存		08-07
21-45	ＳＲ01　15	山茶碗	小碗		(4.2)		5Y7/1灰白色	底部、体部1/2弱残存	自然釉	08-07
21-46	ＳＲ01　15	山茶碗	小碗		(5.2)		N7/ 灰白色	底部1/2弱残存		08-07
21-47	ＳＲ01　西側土堤直下　27	山茶碗	小碗		4.8		N7/ 灰白色	底部のみ残存	自然釉	08-06
21-48	ＳＲ01直下　26	山茶碗	小碗		(5.6)		N8/ 灰白色	底部～体部1/2弱残存	自然釉	08-07
21-49	ＳＲ01　15	山茶碗	小碗		(4.4)		5Y8/1灰白色	底部、体部1/2弱残存	自然釉	08-07
21-50	第2トレンチ　25	山茶碗	甕				2.5Y7/2灰黄色	胴部わずかに残存		08-08
21-51	第3トレンチ　東南拡張区　25	山茶碗	甕	(17.1)			7.5Y7/1灰白色	口縁部、頸部1/2弱～胴下半部1/4残存		07-06
21-52	ＳＲ01直下　25	山茶碗	壺・甕？	(19.4)			7.5Y6/1灰色	底部わずかに残存		08-08
22-01	ＳＲ01直下　25	須恵器	坏蓋				N7/灰白色	体部わずかに残存		09-02
22-02	第2トレンチ　28	内黒土器	坏	(11.6)	(3.1)	5.8	2.5Y7/2灰黄色 内面N3/暗灰色	口縁部1/4～体部、底部わずかに残存		09-03 09-04
22-03	ＳＲ01直下　25	土師器	在地系甕	(11.4)			N8/ 灰白色	口縁部わずかに残存		09-01
22-04	ＳＲ01　15	土師器	清掛型鍋	(22.1)			2.5YR 6/2灰黄色	口縁部わずかに残存		09-01
22-05	ＳＲ01直下　27	土師器	伊勢型鍋	(18.7)			7.5YR 7/3にぶい橙色	口縁部わずかに残存		09-01
22-06	近代以降堆積土　11	土師器	清掛型鍋	(31.8)			7.5YR 6/6橙色	口縁部わずかに残存		09-01
23-01	ＳＲ01　15	土師質土器	かわらけ	6.9	2.9	1.5	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁部～体部1/3欠損		09-05
23-02	ＳＲ01　15	土師質土器	かわらけ	(6.9)	3.1	1.8	2.5Y6/3にぶい黄色	口縁部～体部2/3欠損		09-05
23-03	ＳＲ01　15	土師質土器	かわらけ	6.9	3.8	1.3	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁部～体部1/4欠損		09-05
23-04	ＳＲ01　15	土師質土器	かわらけ	6.9	3.3	1.6	10YR7/3にぶい黄橙色	口縁部～体部1/4欠損		09-05
23-05	ＳＲ01　15	土師質土器	かわらけ	6.8	3.9	1.5	7.5YR7/4にぶい橙色	完形		09-05

第３表　出土土器観察表　その１

挿図	遺構・土層番号	様式	器種	口径cm	底径cm	器高cm	色調	残存	備考	写真図版
23-06	第7トレンチ　15	志戸呂	大型鉢		(10.9)		2.5YR4/2灰赤色	底部わずかに残存		10-04
23-07	ＳＲ01　15	志戸呂	灯明皿	(9.7)	(3.5)	2.2	10Y3/4暗赤色	体部部1/3、口縁部、底部わずかに残存		10-03
23-08	ＳＲ01　15	志戸呂	徳利		(6.6)		内面5YR5/3にぶい赤褐色	底部1/2残存		10-04
23-09	ＳＲ01　15	志戸呂	擂鉢	(25.9)			5YR5/3にぶい赤褐色	口縁部～体部わずかに残存		10-03
23-10	第7トレンチ　15	志戸呂	擂鉢	(33.7)			10YR5/4赤褐色	口縁部わずかに残存		10-03
23-11	ＳＲ01　15	瀬戸・美濃	擂鉢	(28.6)			2.5YR5/4にぶい赤褐色	口縁部わずかに残存		10-05
23-12	ＳＸ01直上　15	志戸呂	香炉	11.1	6.8	4.0	10YR 5/2 灰黄褐色	完形		10-02
23-13	ＳＲ01　15	志戸呂	香炉	(9.5)	(3.2)	4.4	10YR 5/2 灰黄褐色	口縁部～底部わずかに残存		10-03
23-14	ＳＲ01　15	信楽	灯明受皿	9.9	4.8	2.0	7.5YR7/2灰白色	完形	油付着	09-06
23-15	ＳＲ01　15	信楽	灯明受皿	(10.7)	(3.7)	2.1	2.5Y7/2灰黄色	全体に1/4残存	油付着	
23-16	攪乱	瀬戸磁	皿		(6.6)		7.5Y8/1灰白色	底部1/2弱～体部1/4残存		10-05
23-17	ＳＲ01　15	瀬戸・美濃	擂鉢	(32.4)			5YR 4/6赤橙色	口縁部わずかに残存		10-05
23-18	ＳＲ01　15	瀬戸・美濃	丸碗	(9.4)			内面10YR 3/3暗褐色	口縁部～体部1/6残存	鉄釉または飴釉	10-05
23-19	ＳＲ01　15	瀬戸・美濃	貫乏徳利		7.9		5Y7/3淡黄色	底部残存		10-01
23-20	攪乱	三河産	火鉢	(22.7)			N3/暗灰色	口縁部わずかに残存		10-05
27-01	確認トレンチ13　23	灰釉陶器	碗	(15.0)			5PB7/1明青灰色	口縁部わずかに残存	自然釉	11-02
27-02	確認トレンチ12　25	山茶碗	碗		(6.6)		5 BG6/1青灰色	底部1/4強残存		11-02
27-03	確認トレンチ13　23	山茶碗	こね鉢	(27.7)			N7/ 灰白色	底部～体部わずかに残存		11-02

※遺構土層番号は第２表に準処する

※口径・底径欄の（）は復原値を示す

第４表　出土土器観察表　その２

挿図	遺構・土層番号	器種	名称	長さcm	幅・径cm	厚さcm	重さg	型式	備考	写真図版
24-01	第7トレンチ　15	銭貨	寛永通宝	2.35	孔径0.55	0.1	3.59	I		11-03,4
24-02	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.45	孔径0.60	0.1	3.63	II		11-03,4
24-03	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.3	孔径0.55	0.1	3.18	I		11-03,4
24-04	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.5	孔径0.60	0.1	3.11	II		11-03,4
24-05	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.35	孔径0.65	0.1	2.12	I		11-03,4
24-06	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.2	孔径0.60	0.1	2.1	III		11-03,4
24-07	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.05	孔径0.55	0.1	1.82	III	背面に「元」	11-03,4
24-08	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.2	孔径0.70	0.1	1.46	III		11-03,4
24-09	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.1	孔径0.65	0.1	1.93	III		11-03,4
24-10	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.3	孔径0.65	0.1	1.96	III		11-03,4
24-11	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.7	孔径0.65	0.1	4.56		四文銭	11-03,4
24-12	排土中	銭貨	寛永通宝	2.4	孔径0.65	0.1	2.63	III		11-03,4
24-13	ＳＲ01　15	銭貨	寛永通宝	2.7	孔径0.65	0.1	4.33		四文銭	11-03,4
24-14	ＳＲ01　15	銭貨	天保通宝	4.8	孔径0.80	0.25	19.26		短軸3.1cm	11-03,4
25-01	ＳＲ01　15	刀？		6.4	3.5	1.0	56.3			10-06
25-02	ＳＲ01　15	鐙		5.0	3.7	0.8	22.97			10-06
25-03	ＳＲ01　15	包丁？		11.4	4.2	0.3	22.61			10-06
25-04	ＳＲ01　15	矢立て		16.8	1.9	1.5	49.23		真鍮製	11-01

第５表　出土金属製品観察表

挿図	遺構・土層番号	器種	長さcm	幅・径cm	厚さcm	重さg	材質	備考	写真図版
26	ＳＲ01　15	砥石	11.9	3.65	3.3	250	凝灰岩		10-06

第６表　出土石製品観察表

第４章　まとめ

御領所遺跡における今回の調査の結果、平面的には調査区の大半を占める自然流路１基、その中に掘り込まれた落ち込み状遺構１基、僅かに検出された中世の遺構面上の溝状遺構１基を確認した。自然流路ＳＲ01が存在した時期は河底直上および№15層より出土した遺物より下限を19世紀代に設定することができる。しかしながら、今回調査区の西側には小出川の現流路が隣接しており、僅か数mの間隔を保ちながら小出川とＳＲ01が百数十年前にほぼ平行して同時存在していたとは到底考え難い。また、ＳＲ01と現在の小出川が幅や深さの点で近似していることも注意される。ところで、現地での調査中に関係諸機関以外の地元の人々が少なからず当遺跡の見学に訪れ、その中には第２次世界大戦以前の当遺跡周辺地域を知る年輩者も幾人か含まれていた。結果として、これら年輩の方々から貴重な情報を頂くことになったのである。いくつかの情報を総合すると、50年以上昔の菊川は本流・支流を問わず頻繁に氾濫し、平坦な菊川地域には小規模な三日月湖状の水溜まりが多数形成されていた。このような水溜まりは横地地区の小出川流域にも存在し、今回調査区内のＳＲ01はその一つではないかということである。確かに、今回調査区の辺りには「枯れることはないが、普段はあまり流れのない浅い川」や「南北に細長い水溜まり（溜池）」があったと明言する年輩者も数人いる。また、ＳＲ01の両岸には護岸施設の一部が残存していたが、これらの杭や横木についても「見覚えがある」と言う人さえいた。

そこで、静岡地方法務局小笠出張所に保管されている土地法典の古い地籍図を調べたところ、明治20年（1887年）の地籍図においてＳＲ01の地点を小出川が流れているように描写されていることを確認した。諸般の事情により、この地籍図の複写を本書に掲載することはできないが、「旧小出川」は今回調査区の北約30mで急に太くなり、幅20m以上の溜池状を呈す。流路の途中で溜池状態になること自体が、水流の緩やかさを物語っていると考えられる。また、調査区の南北両側で激しく蛇行し、流域の地目はほとんど水田である。よって、明治20年の地籍図における「旧小出川」の特徴は第３章第２節で述べた自然河川ＳＲ01の観察所見にほぼ一致することが分かる。因みに、小出川がほぼ現在の流路となったのは昭和30年（1955年）以降のことであるらしい。

以上より、ＳＲ01は少なくとも19世紀末葉まで存続した小出川の旧流路であることが判明した。この旧流路出土遺物のうち、天保通宝は明治４年（1871年）の新貨条例の公布以後も８厘の価値を付与されて通用し、明治29年（1896年）にようやく通用禁止となったものであり（永井1997，p.100）、上記の地籍図が描かれた頃にはまだ貨幣として流通していたことになる。つまり、ＳＲ01の所属年代の下限の一点を示す遺物と考えられる。他の銭貨については、古寛永さえ遺存状態が良好であり、17世紀以来の２世紀間にわたる通常の流通に耐えたとは考えられない。長らく隠匿（貯蓄）されてきたものが19世紀に入って何らかの理由で突然投棄されたか、或いは、近隣に近世遺跡が所在し、これを今回ＳＲ01として検出された小出川旧流路が破壊し、包蔵遺物を押し流した結果であるかのいずれかであろう。後者の可能性は、近世土器のうちでも16～17世紀代に比定されるものやＳＲ01出土の灰釉陶器・山茶碗などの古代・中世の土器にも当てはまる。

ＳＤ01は今回僅かに検出された中世遺構面上で確認されたが、当遺構面の厳密な年代に関しては、直下の土層より出土した遺物等から判断すれば、山茶碗の古い段階、すなわち12世紀前半に比定し得る。まさに、横地氏台頭の黎明期に相当する。また、平成８年度に菊川町教育委員会によって行われた町道拡張工事に伴う発掘調査では御領所遺跡の中心部付近が対象となったが、山茶碗多数に共伴して掘立柱建物跡や井戸状遺構などが検出され（塚本1997）、今回調査区における遺構面との関連性が窺われる。この遺構面およびＳＲ01のさらに下の土層群は沖積作用による自然堆積層で、今回検出し得た部分につ

いては9世紀初頭～12世紀初頭の時期にわたることが確認された。残念ながら、この「横地氏前史」とも称し得る時期の遺構は今回全く確認されなかったが、平成10年度に菊川町教育委員会により実施された工事立ち会い調査では奈良～平安時代の遺構面が検出され、数十基の土坑・ピットとともに9世紀前半の緑釉陶器の碗1点が出土している（後藤1999）ため、御領所遺跡の中心部に近い地点では律令時代の重要な資料が現在も包蔵されている可能性が高い。このほか、南接する林光寺遺跡と同様に、古墳時代後期の集落域が御領所遺跡にも広がっていることが予想され、今回の調査がこれに関与することはできなかったが、上記の古代・中世の問題とともに今後の調査・研究課題であると言えよう。また、横地地区の近世史の復原というテーマに関しても、今回の調査が微力を捧げる成果に至ったか否かはともかくとして、安直に「新しい時期」と割り切ってこれを捨象するのではなく、むしろ今後一層検討の対象とすべき分野であると述べて、本書の結びとしたい。

〈参考文献〉

足立順司1996『水井遺跡・清水遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第80集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

後藤建一1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」及川　司・鈴木良孝（編）『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』静岡県文化財調査報告書第42集　静岡県教育委員会　218～381頁

後藤和風1999「御領所遺跡」『菊川町文化財年報』第6号　平成10年度　菊川町教育委員会　7～15頁

後藤和風・小金澤保雄・武田秀俊2000『御領所遺跡―小出川浸水対策特別事業に伴う発掘調査―』菊川町埋蔵文化財調査報告書第60集　菊川町教育委員会

匂坂俊一ほか（編）1986『横地村誌』横地村誌編集委員会

佐野五十三1990「清郷型甕の研究―煮沸形態からみた古代末の東海地方―」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』Ⅲ　203～227頁

滝澤武雄・西脇　康（編）1999『日本史小百科　貨幣』東京堂出版

竹内理三ほか（編）1983『角川日本地名大辞典』第27巻　大阪府　角川書店

塚本和弘1994「皿山古窯跡群の成立と終末について」『地域と考古学向坂鋼二先生還暦記念論集』445～466頁

塚本和弘1997「御領所遺跡」『菊川町文化財年報』第4号　平成8年度　菊川町教育委員会　15頁

塚本和弘1999『林光寺遺跡発掘調査報告書』菊川町埋蔵文化財報告書第55集　菊川町教育委員会

永井久美男1997「近世銭貨の流通―二神家伝来古銭の調査を中心として―」『歴史と民俗』14　平凡社　86～110頁

新田　洋1985「平安時代～中世における煮炊用具―「伊勢型」鍋―に関する若干の覚書」『三重考古学研究』第1号　1～8頁

松井一明1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」及川　司・鈴木良孝（編）『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』静岡県文化財調査報告書第42集　静岡県教育委員会　382～430頁

追記

発掘調査および報告書作成に当たり、次の方々から御教示・御指導を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。（敬称略、順不同）
塚本和弘（菊川町教育委員会）、後藤和風（同左）、冨永樹之（当研究所）

また、調査参加者を以下に列記し、参加者名簿に代えるものとする。
現地発掘作業参加者
近藤敏実、前島友子（以上、五十音順）

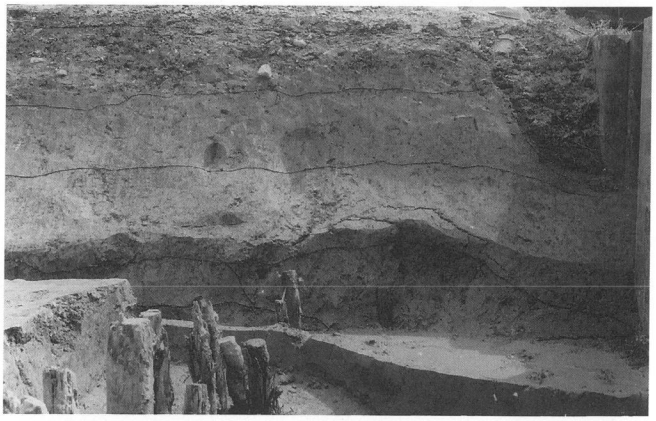
整理作業参加者
池松由貴子、河西淑乃、加藤百合子、川渕由美子、鈴木記代、鈴木由美子、瀧　桂子
（以上、五十音順）

写　真　図　版

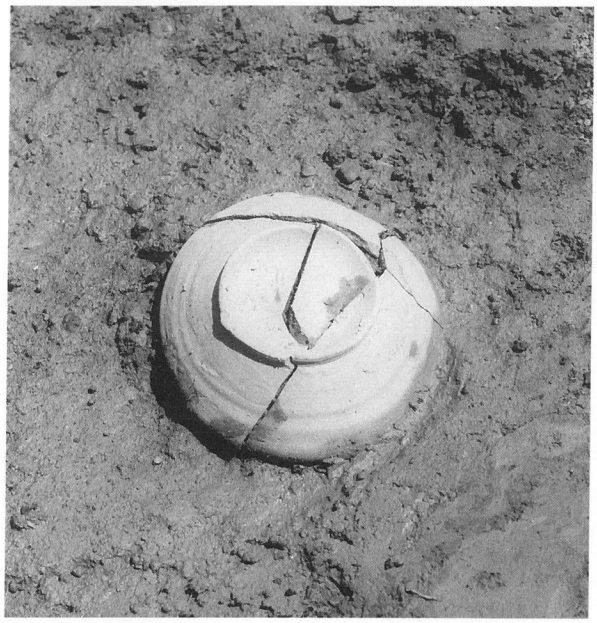
1　南区全景（北より）

2　南区全景（南より）

1　南区東壁セクション



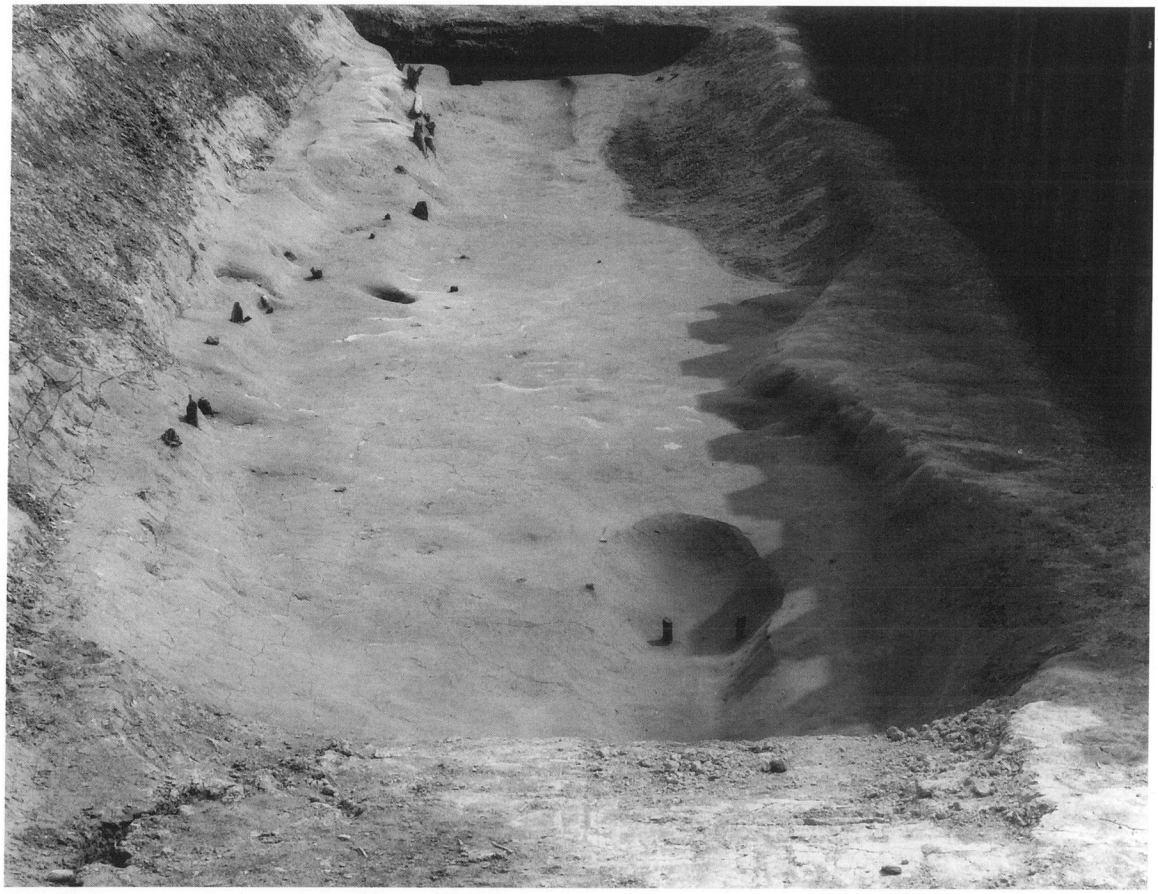
2　南区南壁セクション



3　ＳＲ01西側土堤　山茶碗出土状況

4　南区中世遺構面直上　山茶碗出土状況

5　南区中世遺構面検出状況



1　北区全景

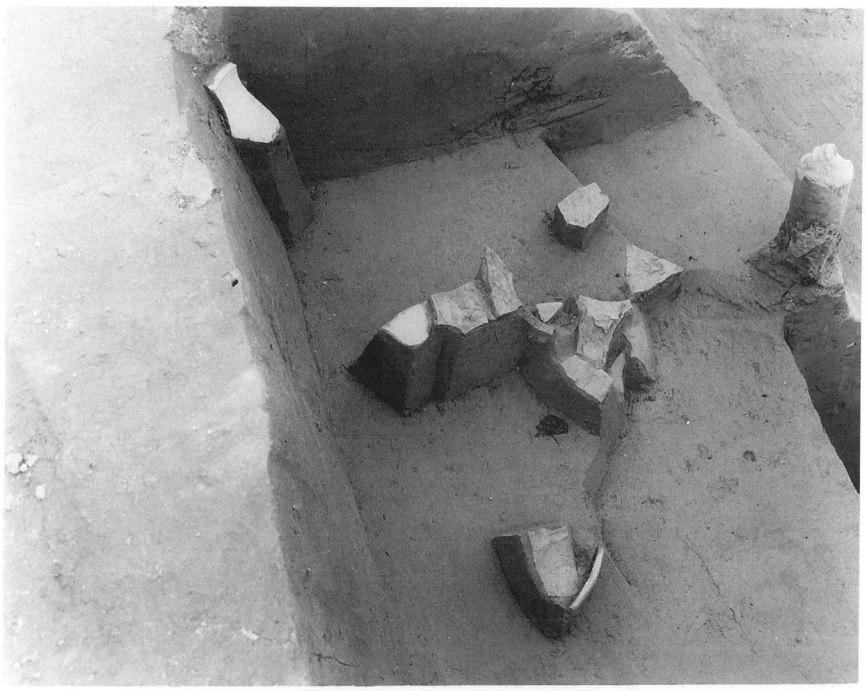
2　ＳＤ01完掘状況

1　ＳＸ01完掘状況

2　北区東壁セクション

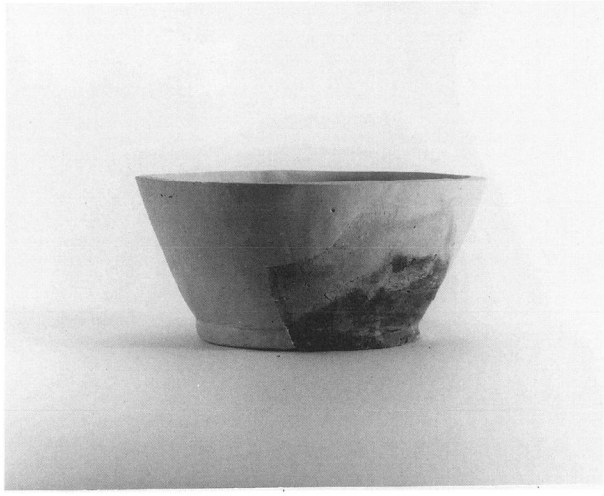
3　ＳＲ01西側土堤直下
山茶碗出土状況

1 北区中世遺構面下層
灰釉陶器出土状況



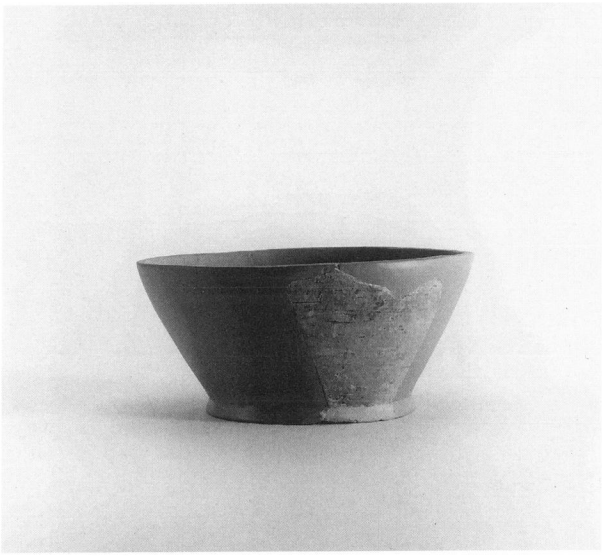
2 第2トレンチ
北壁セクション

3 第2トレンチ
灰釉陶器出土状況

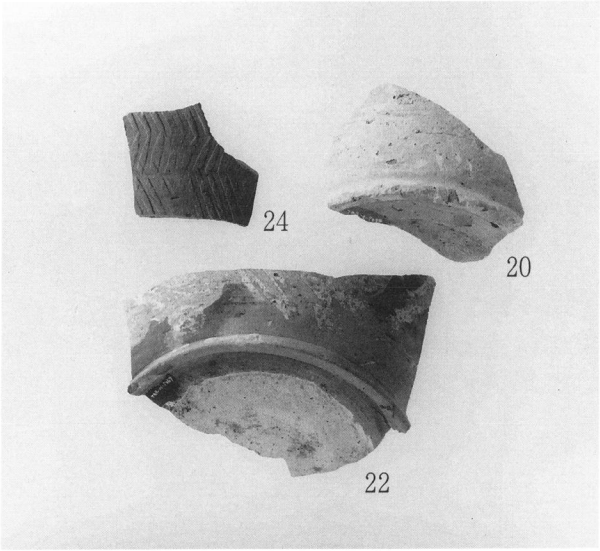


1　灰釉陶器　壺（第19図23）

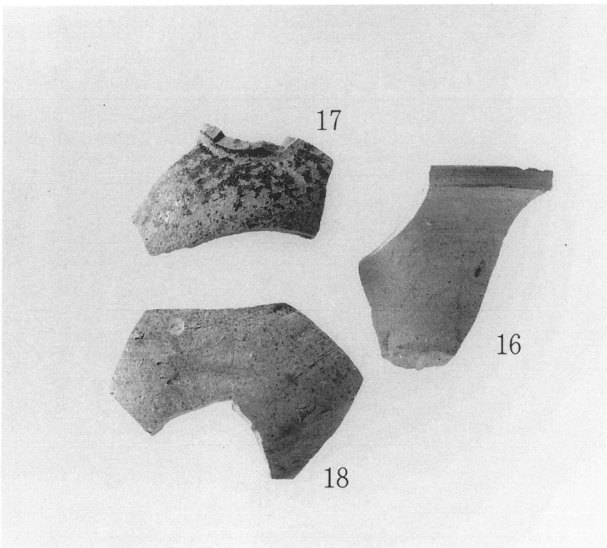
2　灰釉陶器　壺（第19図19）



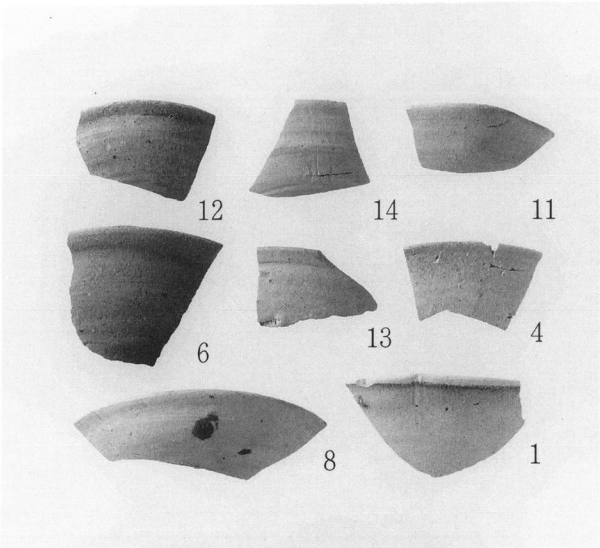
3　灰釉陶器　壺（第19図21）



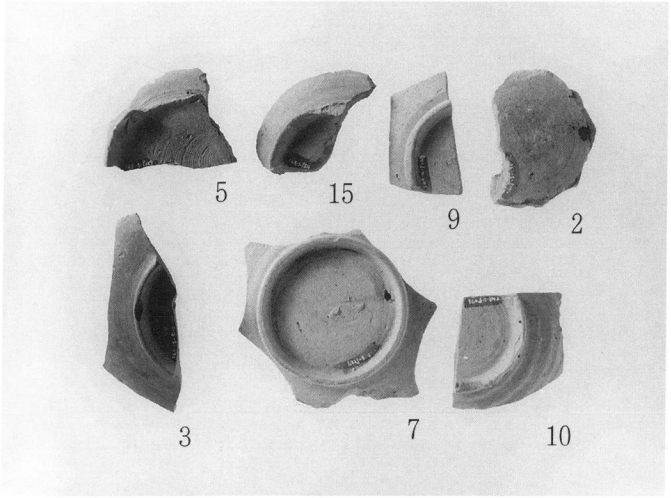
4　灰釉陶器　壺・甕（第19図）



5　灰釉陶器　長頸瓶・壺（第19図）

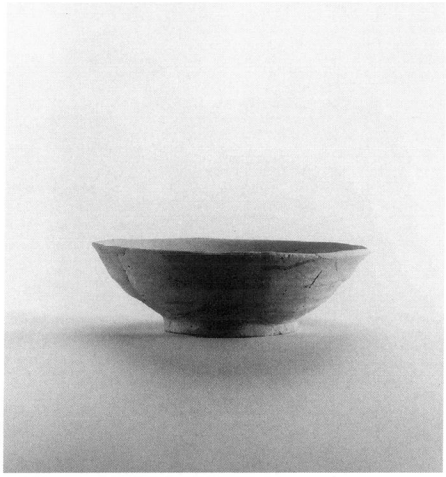


6　灰釉陶器　碗・皿・小碗（第19図）
その１

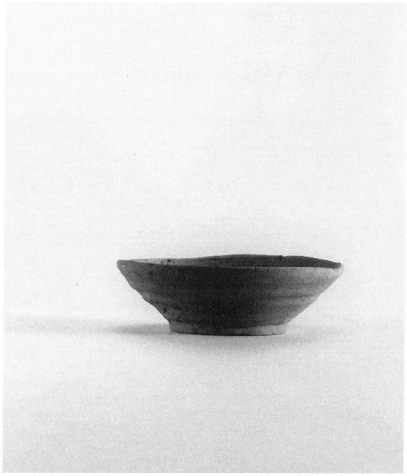


1　灰釉陶器　碗・皿・小碗（第19図）
その 2

2　山茶碗　碗（第20図30）



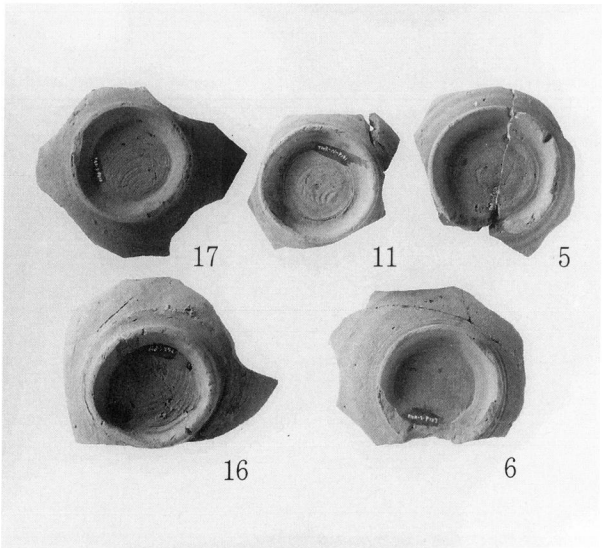
3　山茶碗　小碗
（第21図42）



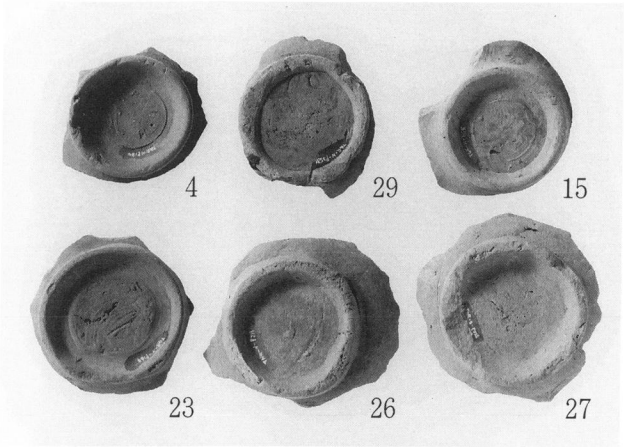
4　山茶碗　小碗
（第21図37）

5　山茶碗　小碗
（第21図40）

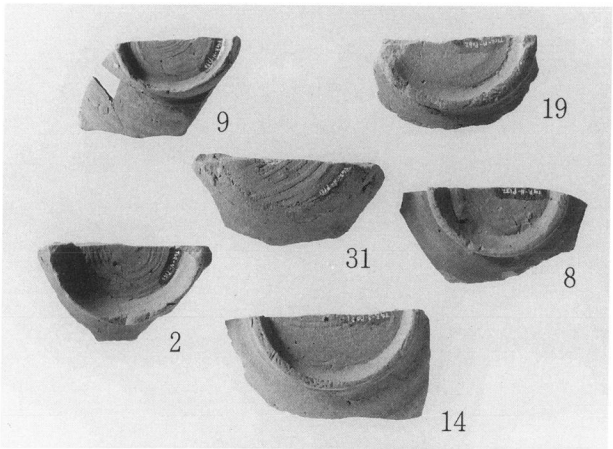
6　山茶碗　甕（第21図51）



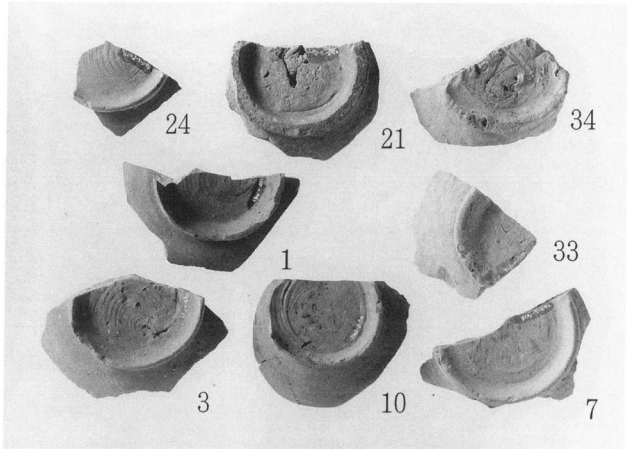
7　山茶碗　碗（第20図）その 1



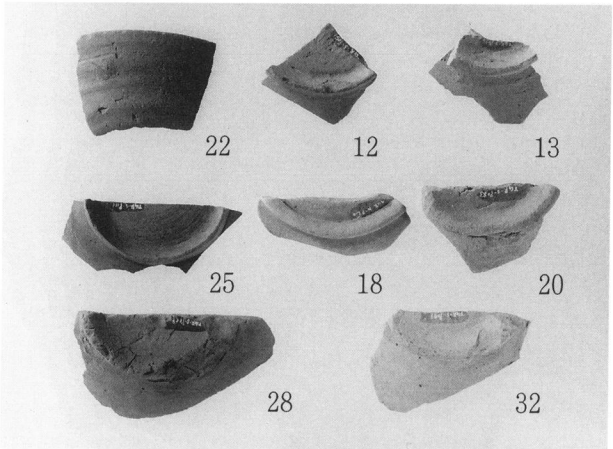
1　山茶碗　碗（第20図）その 2



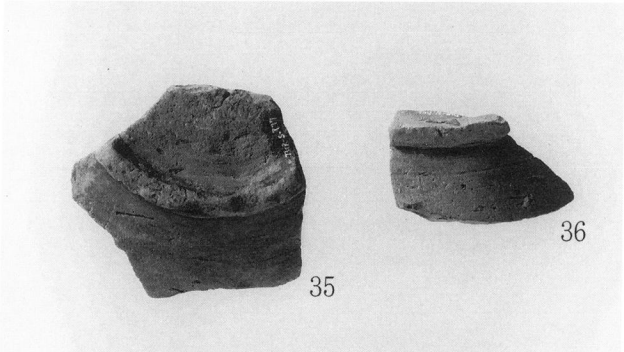
2　山茶碗　碗（第20図）その 3



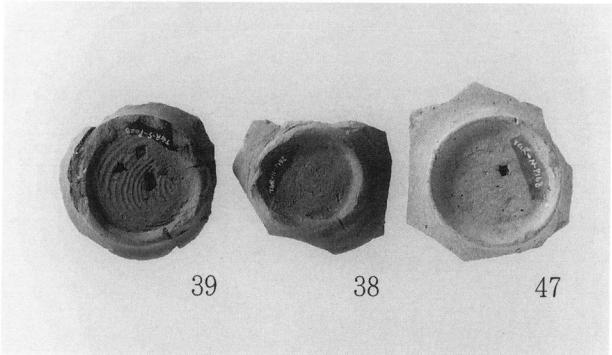
3　山茶碗　碗（第20図）その 4



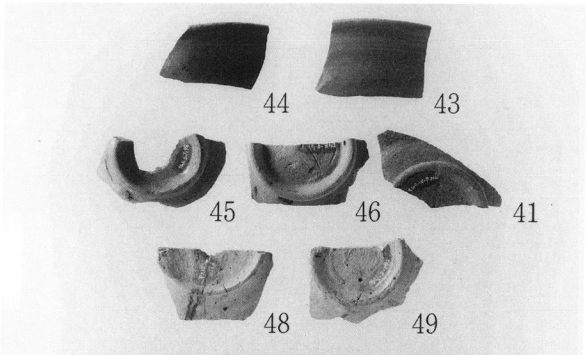
4　山茶碗　碗（第20図）その 5



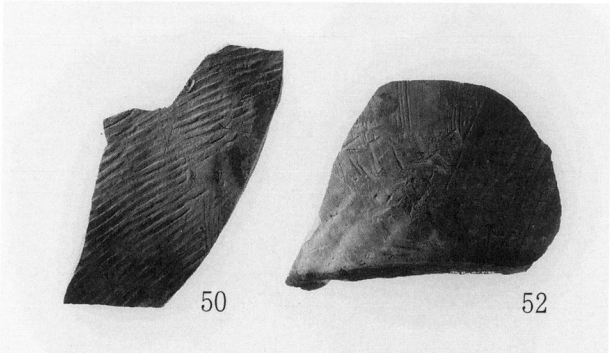
5　山茶碗　鉢・こね鉢（第20図）



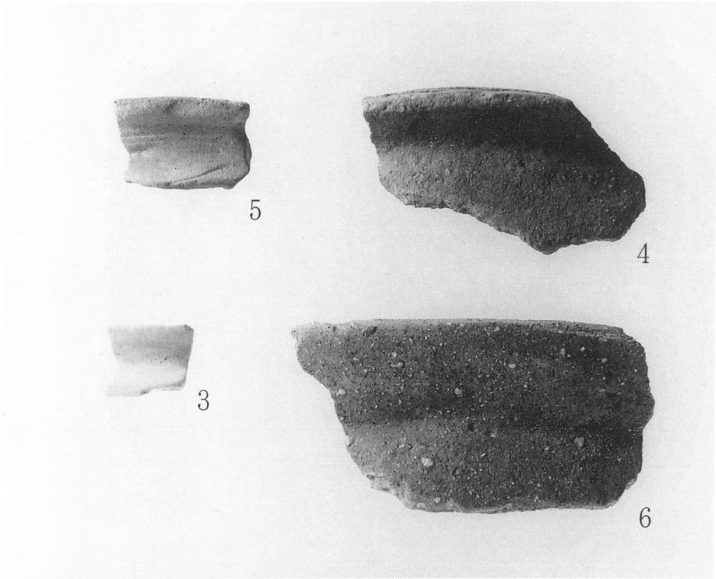
6　山茶碗　小碗（第21図）その 1



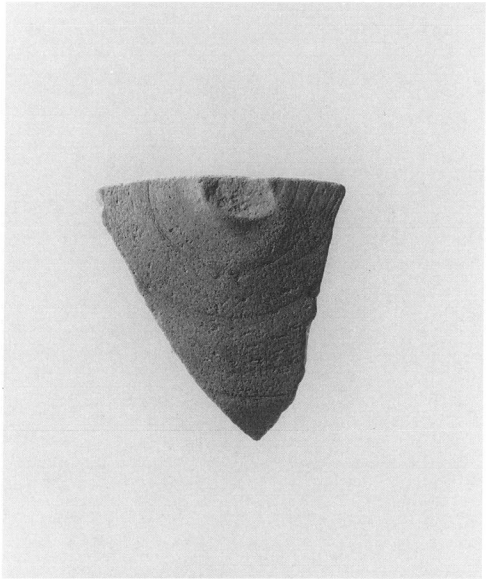
7　山茶碗　小碗（第21図）その 2



8　山茶碗　甕・壺（第21図）



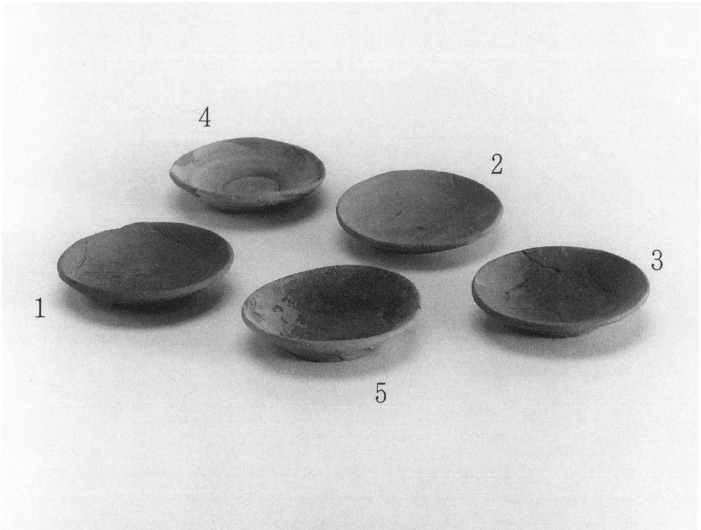
1　土師器　鍋・甕（第22図）



2　須恵器　坏蓋（第22図１）

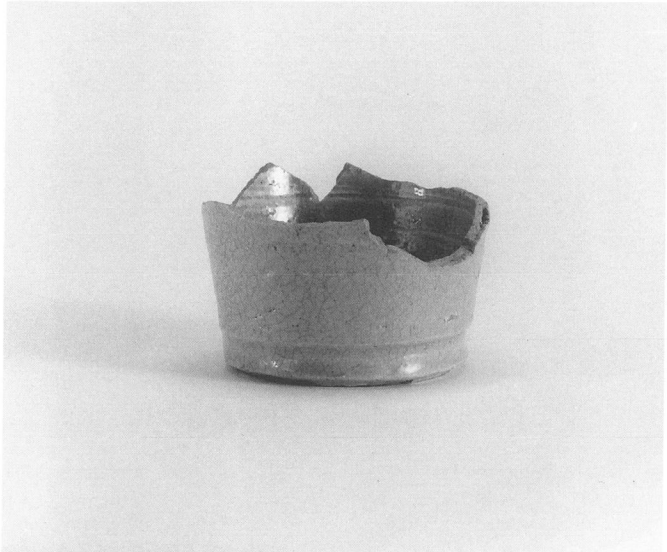
3　内黒土器　坏（第22図２）外面

4　内黒土器　坏（第22図２）内面

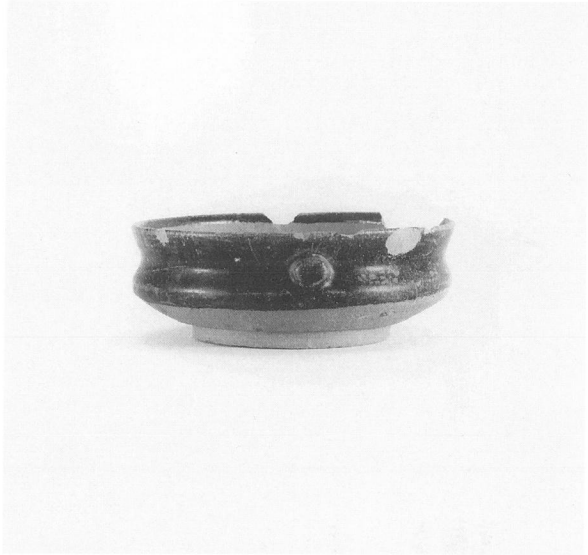


5　かわらけ（第23図）

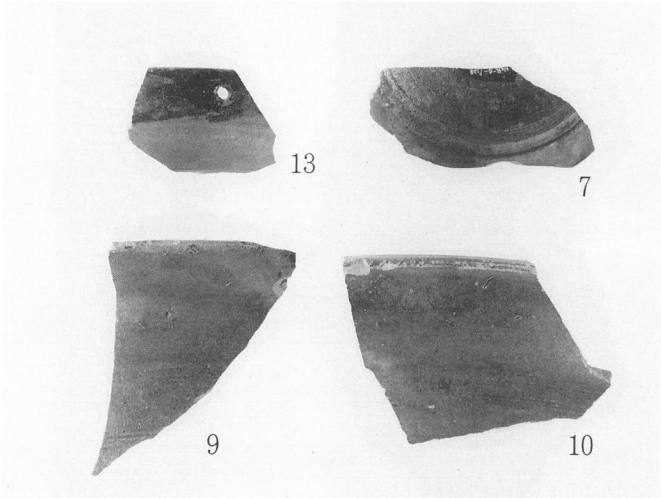
6　信楽焼　灯明受皿（第23図14）



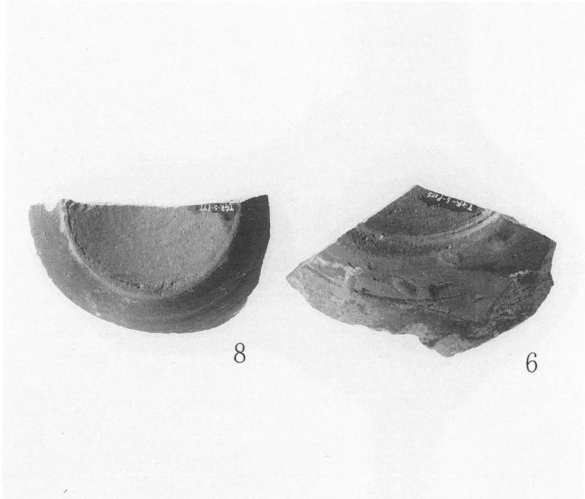
1　瀬戸・美濃焼　貧乏徳利（第23図19）



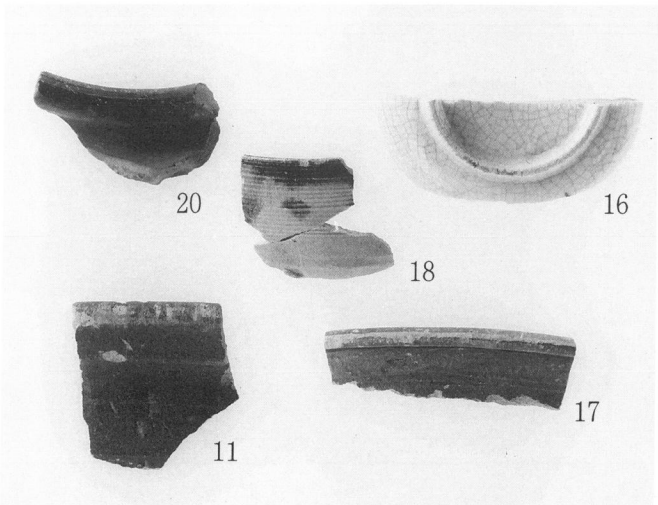
2　志戸呂焼　香炉（第23図12）



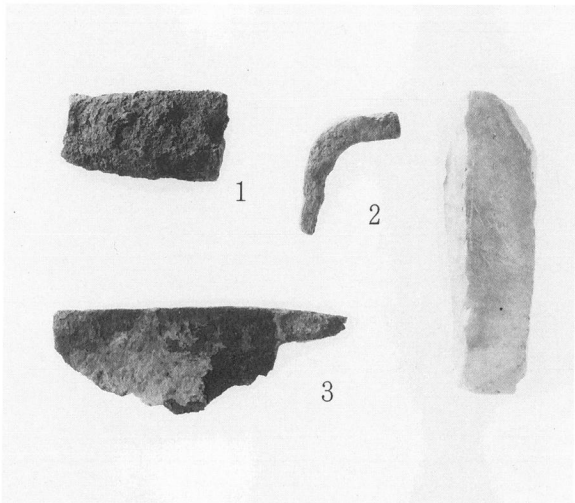
3　志戸呂焼　香炉・灯明皿・擂鉢（第23図）



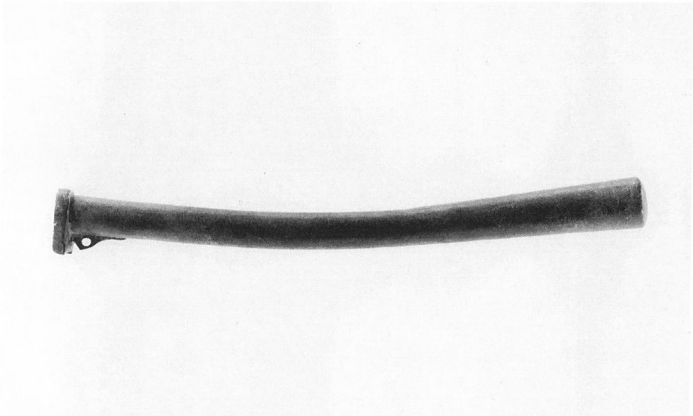
4　志戸呂焼　徳利・大形鉢（第23図）



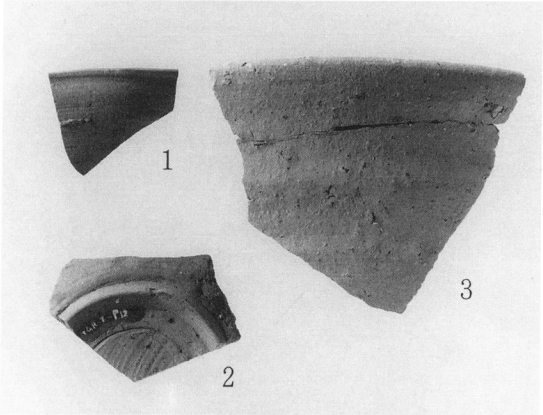
5　近世陶磁器（第23図）



6　鉄製品・砥石（第25・26図）

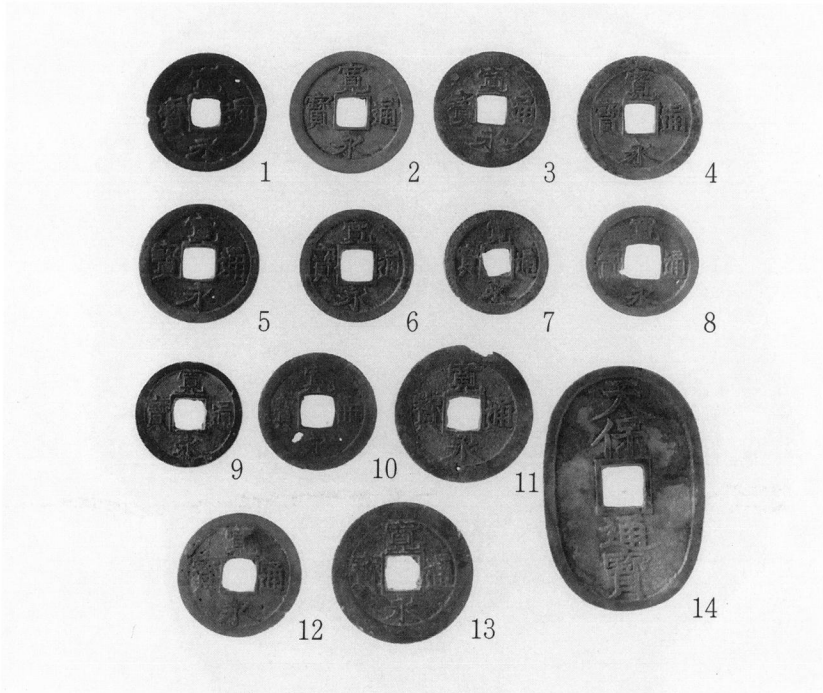


1　矢立て（第25図４）

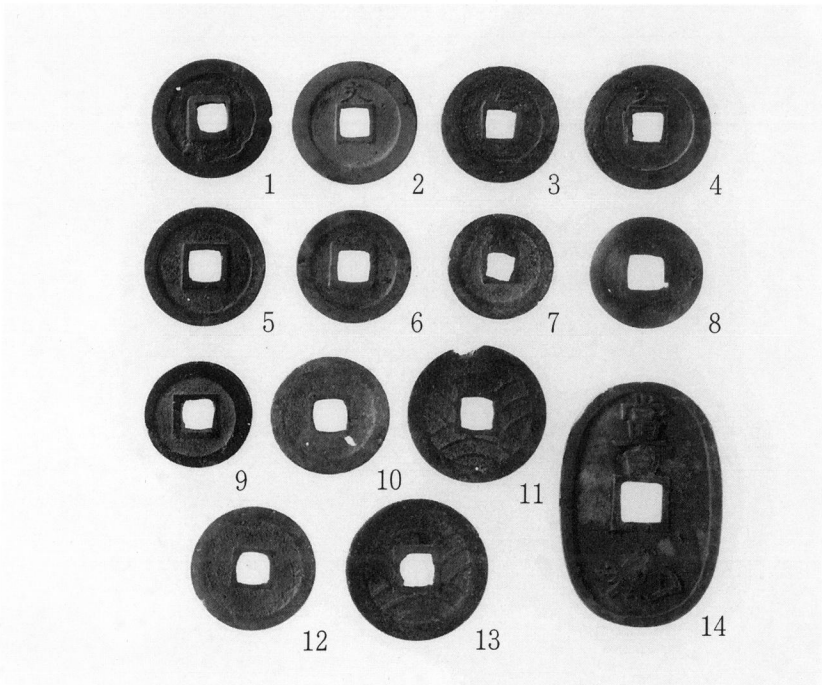


2　確認調査出土遺物（第27図）

3　銭貨（第24図）正面



4　銭貨（第24図）背面



報　告　書　抄　録

ふりがな	ごりょうしょいせき
書　　名	御領所遺跡
副 書 名	平成12年度二級河川小出川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第127集
編著者名	大林　元
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所 在 地	〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20　　TEL 054-262-4261(代)
発行年月日	2001年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
御領所遺跡（ごりょうしょいせき）	静岡県小笠郡（しずおかけんおがさぐん） 菊川町加茂地先（きくがわちょうかもちさき）、 東横地地先（ひがしよこじちさき）	22446	106	34° 43′ 49″	138° 05′ 39″	2000.4.1 ～ 2000.5.31	270㎡	河川の 改修工事

所収遺跡名	種　別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御領所遺跡	散布地	平安時代		須恵器　内黒土器 灰釉陶器　土師器 山茶碗	
		中世	溝状遺構　1	山茶碗	
		近世	自然流路　1 落ち込み状遺構１	陶磁器　土師質土器 銭貨　金属製品　砥石	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第127集

御　領　所　遺　跡

平成12年度二級河川小出川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月30日

発行所　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20
TEL　054-262-4261（代）

印刷所　東洋印刷株式会社　静岡支社
静岡市中村町217静和ビル２Ｆ
TEL　054-282-4764（代）